# 田井中遺跡発掘調査概要・Ⅷ

1999.3

大阪府教育委員会

# はじめに

大阪の地は、西に瀬戸内、他を山地で限られ、平野を形成してしています。中央にある河内低地をはじめ各地域に低地、台地などがひろがっています。古くから人々の活動の舞台となっていたことは低地のみならず、台地から山地にまで発見される遺跡からうかがうことができます。また、出土する文物からは、それがこの地域内だけでなく、他地域から将来されたもの、影響を受けたものなど多様な在り方を知ることができます。各時代ごとにみられる東日本や西日本の各地域との交流は、現在の我々が想像する以上です。こうした文化のながれのうち、現代の我々の生活様式の出発点となったもの、その西方からの文化の波が弥生文化の到来です。稲作を核とするこの文化は、これまでの食物採集の経済から食物生産のそれへと大きく変換させる契機となりました。この歴史上の転換期の各地域での様相が、近年の調査で徐々に明らかになってきました。近畿地方でも大阪平野の中央部を占める河内平野での調査がとくに活発になってきました。田井中遺跡の調査もそのひとつといえます。今までの調査から、弥生時代前期の環濠集落をはじめ、それ以前にこの地に進出してきた人たちの居住区、環濠集落廃絶後も活発に存続する弥生時代中期以降を中心とした集落、北に広がる前期からの水田など、農耕社会の形成から発展への実相をつぶさに究明できる遺跡として注目されています。

さて、今回も前年度に続き、平野川の改修工事にともない調査を実施しました。田井中ムラの形成過程を探る上でたいへん関心のある地域を調査しました。その成果は、本書で報告するとおりですが、前回の調査成果をさらに明確にすることができました。

調査に際しましては、地元の方々ならびに関係各位に多くのご協力を得ましたことに、深く感謝いたします。ひきつづき、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

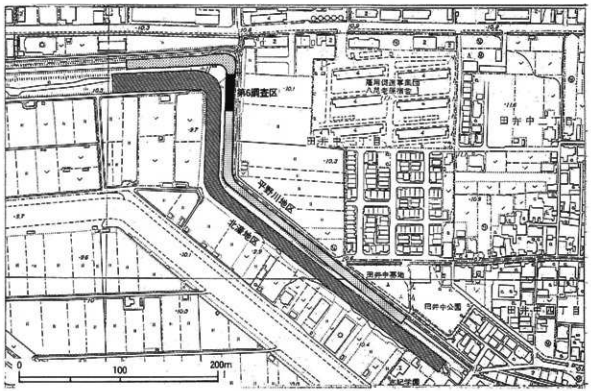
平成11年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　鹿野一美

# 例　言

1. 本書は、一級河川平野川改修工事に先立って実施した八尾市空港1丁目所在の田井中遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部河川課の依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課技師亀島重則を担当者として実施した。
3. 現地調査は、平成10年度事業として、平成10年5月から開始し、平成11年3月まで行なった。

   なお、出土資料の整理作業は、現地作業と併行して行なった。
4. 本書で用いた標高は全てO.P.値、単位はmである。
5. 座標は調査区内において任意で設定し第2図に示した。国土座標第Ⅵ座標系による位置は第22図に示した。本書で使用した方位はすべて座標北である。
6. 土層の色調の記述は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖　7版』(1987)によった。
7. 本書の執筆・編集は、亀島が行なった。なお、遺跡出土の弥生人歯の分析は、多賀谷　昭氏(長野県看護大学教授)にお願いし、原稿を執筆していただいた。
8. 出土遺物の写真は、阿南辰秀・伊藤慎司の両氏が撮影した。




第1図　調査区位置図

# 第1章　調査にいたる経過

遺跡は大阪平野の中央部に位置する河内平野にある。八尾市田井中1丁目～4丁目、空港1丁目、老原4丁目をその範囲とする。1975年、遺跡の南にあたる八尾空港の北東にある陸上自衛隊八尾駐屯地の構内で、下水道工事の際に発見された。その後、1982年になって、(財)八尾市文化財調査研究会により本格的に発掘調査が実施された。これは、今日行なわれている調査の嚆矢となったものである。以後、自衛隊構内の施設建設にともなって、(財)八尾市文化財調査研究会を中心に八尾市教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センターが調査を行なっている。大阪府教育委員会は、1990年から自衛隊構内地域での調査とはべつに西側地域での調査を開始した。八尾空港を巡る水路(八尾空港北濠)の改修工事に先立って行なったもので、多くの成果を得た。まず、弥生時代を中心とした遺跡が自衛隊構内地域より西へ広がること。しかも、弥生前期の遺構・遺物群が微地形にそってまとまりを見せ、とくに環濠集落の存在を推定できたこと。さらに古墳前期や奈良・平安時代の遺構群の存在を認めたことなどがある。この北濠に接して平野川が流れるが、1995年からは、この平野川の改修工事にともなって、調査がはじまった。今回の報告もこの一連の調査による成果である。

# 第2章　調査の成果

## 1．調査の方法（第2、3図）

今年度の調査は、平野川の調査区のうち、下流部の1箇所で実施したで(第6調査区、290㎡)。現河川にほぼ重複した位置での改修工事であり、調査は河川中央で二分し、片側づつ工事と平行しながら実施した。今回の工事は、河川部に加え、調査区の中央を橋梁が横断する。この橋梁基礎部も対象となるが、調査は工事掘削の及ぶところまでとした。

遺構・遺物の平面的位置を記録するために、従来からもちいている任意座標を利用した。これは、北濠地区の調査から使用しているもので、計画水路に沿って作ったものである。因みに今回の調査区は、G～I・74～81区となる。今までの一連の調査では、これに最終面である弥生時代の面についてのみ行い、国土座標に基づき、ヘリコプターによる写真測量を実施し、任意座標を取り込むという手法をもちいてきた。報文中での遺構については、現場での野外番号をそのままま使用した。

## 2．遺跡の土層的構成（第2図）

北濠・平野川の両地区の調査区は、延長約500mに及ぶ。先行して調査に入った北濠地区では現行の水路部分と重なり、平面的な調査は平安時代前期以前、それも下部層以下に限られたものであった。部分的にみられる断面によって、全体的な土層序のなかでの位置付けを試みていたものの明瞭さを欠いていた。遅れて開始した平野川地区での調査は、現河川で破壊されている部分は多いものの、平面的な調査と土層の観察を可能にし、大きな成果をもたらした。

各地点での堆積土層は層相に多様な変化を示しているが、今までの調査の過程で徐々に土層の特徴や遺構面に対する認識を高めてきた。とくに同一面の連続性とその広がりに意を注いできた。各土層を遺構面を形成するベース土として、またそれを被覆し埋没させるものとして、多様な土層群を整理し理解しようとしてきた。たとえば、ある遺構面があって、それを被覆する堆積土（群）をその遺構面番号と同じ番号名で呼称し、その遺構面の下位の遺構面までの土層をベース土として把握するという方法である。現在田井中遺跡では、遺構面は大きく1～5面に分かれ、さらに各面でいくつかに細分できる。全部で12枚の遺構面を検出した。各土層の包含する遺物やそれをベース土として掘削あるいは構築する遺構の時期から各上層の堆積年代を推定する。

ここでは、第6調査区での土層序について先の方式で整理して説明しよう。

**第0層**（1～6）灰白色系粘質微砂質土～微砂質粘質土 鉄斑（糸根状）・マンガン斑を多く含み全体に褐色味を帯びる。中世。

**第1層**（7・9）青灰色微砂質粘土 鉄斑を含み、褐色味を帯びる。平安時代後期。

**第2a層**（8・10～13）青灰色微砂質粘土～粘土 鉄斑により褐色味を帯びる。平安時代中期。

**第2b層**（15・17・19）青灰色粘質微砂質土～微砂質粘土 鉄斑を含む。平安時代中期。

**第3a層**（18・20・21）青灰色～明緑灰色微砂～微砂質粘土 鉄斑を含む。南部では、微砂～中砂が主体で堆積する。下部でラミナがみられる。平安時代前期。

**第3b層**（22）明緑灰色微砂質粘質土 平安時代初葉。

**第3c層**（23・24）灰白色～明緑灰色粘土 褐灰色粘土（有機物起源）が多く混じる。飛鳥・奈良時代。

**第3d層**（25・26）黄灰色～灰色粘土 微砂質粘土気味。鉄斑（糸根状）を多く含む。飛鳥・奈良時代。

**第3e層**（27～29）灰色粘土～微砂質粘土 鉄斑を含み、褐色味を帯びたり、炭酸鉄ノジュール粒を含んだりする。飛鳥・奈良時代。

**第4a層**（30）褐灰色微砂質粘土 第4b層起源の土が混じる（30%）。古墳時代中期包含層。

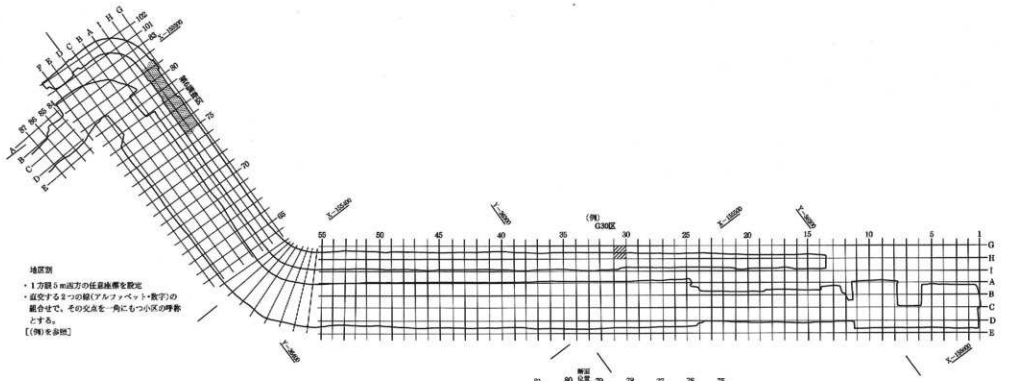
**第4b層**（31）灰白色微砂質粘土 褐灰色微砂質粘土の斑点が少し混じる。古墳期（4a面）ベース上。古墳時代前期（庄内式期）。

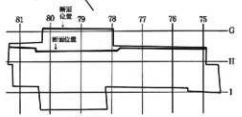
**第5a層**（32）褐灰色微砂質粘土 最上部では、㎜大以下の砂粒が混じる。下部では第6層起源の土が多く混じる。境界は不鮮明。突帯文期包含層。

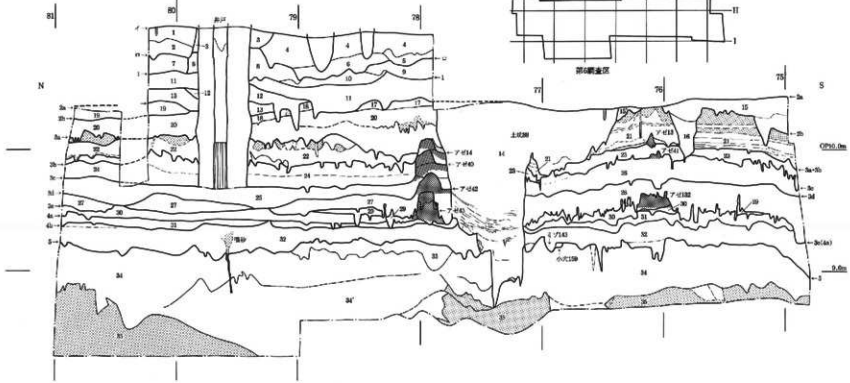
**第5b層**（33）褐灰色微砂質粘土 32層より34層起源の土が多く混じる。34との境界は不鮮明。突帯文期包含層？

**第6層**（34）明緑灰色微砂質土 32層の影響か、褐灰色微砂質粘土の斑点が混じる。最上部は粘質微砂質土。

**第7層**（35）灰白色他砂1～3㎜大以下。北濠地区の突帯文土器（滋賀里Ⅳ式土器）出土層に対応。

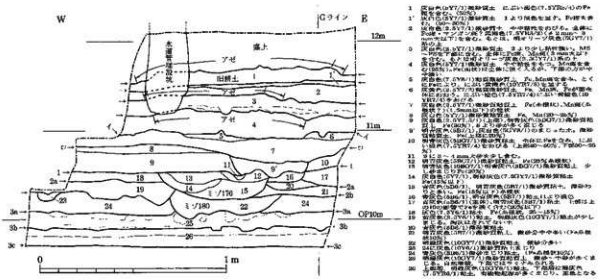



1 灰黄色(2.5YT/2)砂質細砂質土　鉄錆・マンガン混ふくむ。鉄錆が顕著におおう
2 灰白色(2.5YT/1)粗砂質粗質土　鉄錆(赤褐状)マンガン混ふくむ
3 灰白色(2YT.5/1)粗質細砂質土　鉄錆(赤褐状)ふくみ、にぶい橙色(7.5YT7/4)をおびる(30%)
4 1に対応、にぶい橙色(7.5YR7/4)有機質砂質土　粗分が全般をおおう。部分的に本多の灰白色(5Y8/1)がみえる。マンガン斑(20～30%)
5 にぶい黄橙色(10YR7/3)粘質細砂質土　鉄錆が全面をおおう。本多有機粒(10YR7/1)
6 褐黄色(5YT/4)細砂質粗質土　鉄錆が全面をおおう
7 明褐灰色(10GY7/1)粗砂質粘土　全体に鉄錆をふくみ、にぶい橙色(7.5YR7/4)をおびる(上部40～60%、下部30～35%)
8 明黄灰色(5BY/1)粗砂質粘質土　鉄錆(赤褐状)をふくむ(30%)、テラス状鉄錆面のベース土
9 青灰色(5BG/1)粗砂質粘土～灰白色(5GY8/1)粗砂質粘土のまじった土。鉄錆(粒状・赤褐状)と上部層25%、下部層15～20%)
10 青灰色(5BG6.5/1)粗砂質粘土　鉄錆ふくむ。(15%以下)
11 明褐灰色(10GY7/1)粘土　少し粗砂まじり　鉄錆15%以下
12 灰白色（5YT6)細砂まじり粘土　中世のカワラ(7.5YT5/1)をかぶる。鉄錆(35%以下)
13 明褐灰色～青灰色(5BG.8/1)粗砂まじり粘土　鉄錆ふくむ(10%)
14 明褐灰色(10GY/1)～明黄灰色(2.5GY7/1)粗砂質粘土と明緑灰色(10GY/1)～明褐灰色(7.5GY7/1)粗砂～粗砂がまじった土　下部層では明黄灰色(10BG7/1)粗砂質粘土～粘土と灰白色～淡黄色(7.5YR.8～8/1)粗砂のうすい層が互層で堆積。15mm大以下の粗砂質粘土～粗砂質粘質土がまじる。土製品増土
15 青灰色～明青灰色(10BG6/1～5BG7/1)粗質細砂質土
16 青灰色(5BG6/1)粗砂質土
17 青灰色(5BG6/1)粗質細砂質土　下層では炭層色(2.5Y6/1)をはす。西14層土
18 青灰色(5B6/1)粗砂質粘土　斑鉄をふくむ
19 青灰色(5B6/1)粗砂まじり粘土　部より斑鉄をふくむ。鉄錆本層状30%
20 明青灰色(5BG7/1)粗砂質粘土　斑鉄全体をおう。
21 青灰色(5B6/1)粗砂まじり粘土　鉄錆本層状30%
22 青灰色～明青灰色(10BG6/1～7/1)粗砂～粗砂質土　上部は褐砂～中砂が主体。全体に水平方向のラミナが顕著
23 明褐灰色(10GY7/1)粗砂質粘質土　斑鉄～中砂がふくまじる。下位でラミナがみられる
24 灰白色(5Y7/1)粘土　斑状色(10Y8/1)粘土が混在ぶくまじる。灰白色(7.5Y8/1)粗砂が全体にまじり斑砂質粘土質粘土になる
25 明褐灰色(10GY8/1)粘土(上部)　下部層は褐灰色(7.5Y6/1)粘土に有機物層がまじりはじめ、黒色となる
26 黄灰色～灰白色(2.5Y6.5/1)粘土　粗砂質粘土が多い。鉄錆(本層状)が10%以上
27 灰色(5Y6/1)粘土　やや粗砂質粘土質粘。鉄錆ふくむ
28 褐灰色(10YR6/1)灰色(灰白8/0.9)をおびる粘土　鉄錆(本層状)ふくむ(25%)
29 灰色(5Y6/1)粘土　20cm下位粘つよい。20数層ノジュール粒(1～5cm大以下)をふくむ(20～30%)
30 黄灰色(2.5Y6/1)粗砂質粘土　灰色(7.5Y6/1)をかしおびる
31 褐灰色(10YR4/1～5/1)粗砂質粘土　31石室のもとがまじる(30%)。古墳期貼床層
32 灰色(5GY8/1)粗砂質粘土　褐灰色(10YR5/1)粗砂質粘土の塊状がまじまる。古墳期ベース土
33 褐灰色(10YR4/1～5/1)粗砂質粘土　最上面部では2mm大以下の砂粒がまじる。下面では34粘質の土がまじまじる。塊界は不詳明。奈良文献包含層
34 31より粘質のとがまじまじ(20%)。34との境界は上り不鮮明
34' 明褐灰色(10GY7/1)粗砂質土　34の断層か。褐灰色(10YR4/1～5/1)粗砂質粘土の塊状(1～5mm大以下)がまじる。最上部は地質粗砂質土
35 明青灰(10GY7/1)粗砂質土～粗砂～中砂
35' 灰白色(7.5Y8/2)粘砂　ø 1～3 mm大以下

第2図　調査区地区割図・第6調査区土層断面図



第３図　土層断面図（橋梁基礎東部北壁、 1/40）

## 3．遺構

調査の結果、縄文時代晩期後半から古墳時代前期～後期、飛鳥・奈良～平安後期および中世にかけての遺構・遺物が出土した。

**a．縄文時代晩期後半**（5a・b面）（第４図）

遺構としては、溝・土坑・小穴・落ち込みなどがある。２面認められる。

上位面（5a面）

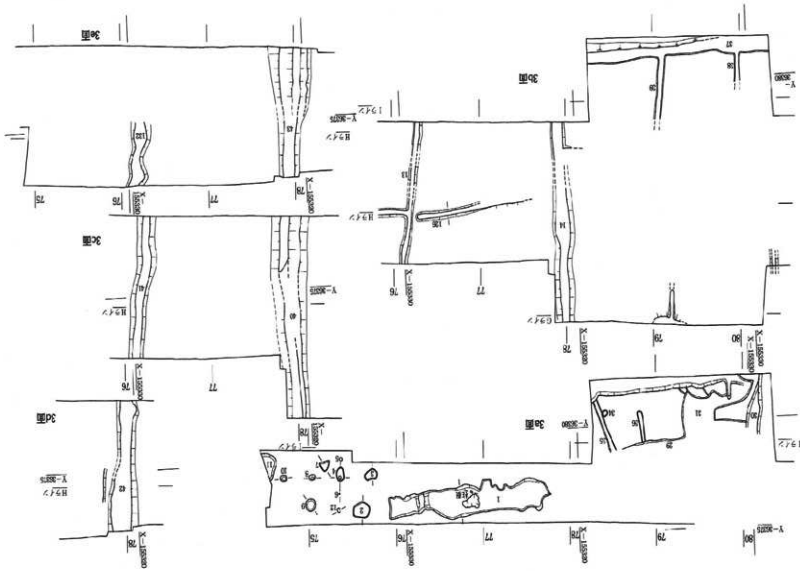
調査区北部西側から南東寄りに幅 1.85～2.16m、深さ0.18mの溝48が走る。北端では、北に延びる幅0.39～0.42m、深さ0.12mの溝と西へ幅0.7m、深さ0.13mの溝に分岐する。北に延びる溝は第5調査区で検出された溝に接続するとみられる。調査区東部では、西に傾斜する落ち込み146が南北に走る。この落ち込み傾斜面には小穴がいくつかみられる。溝48の東岸線と連絡する可能性が高い。この落ち込みは、下位面からあった自然地形の傾斜に沿ったものとみられる。

下位面（5b面）

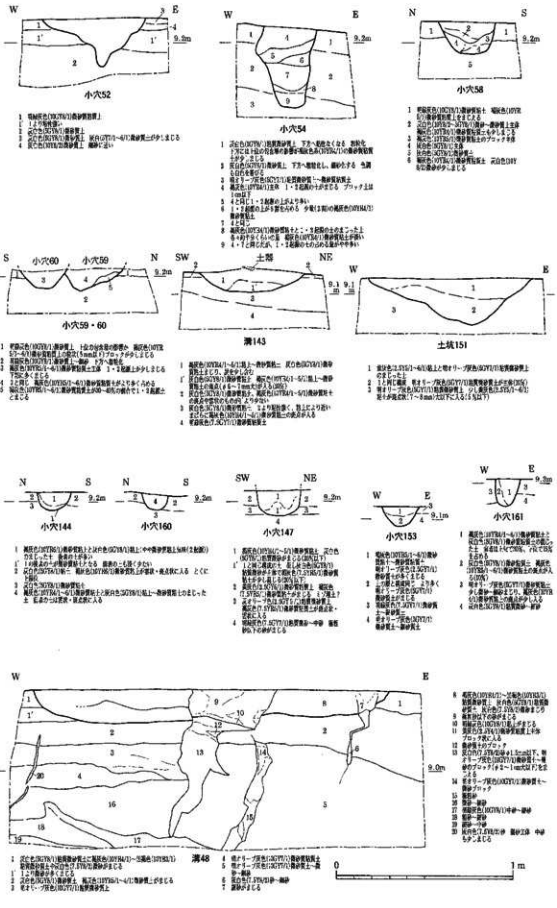
小穴を主体に、分布密度はやや希薄ではあるが、調査区全域に広がる。中央南寄りに緩いカーブで走る溝143がある。幅0.43～0.55m、深さ0.1mの溝。長さ2.2m以上。これに小穴159が重複する。他に北部のH80区で幅0.35～0.38m、深さ0.1mの溝53があるが、調査区外に延びる。G80区の土坑151は1.04×0.72m、深さ0.11mを測る。各所に数個づつ散在する小穴は0.13～0.4m、深さ0.06～0.1mで、埋土は褐灰色～灰白色系微砂質土である。

**b．古墳時代前期～中期**（4a・b面）（第５図）

２面認められる。上位面（4a面）は中・後期（布留式期）、下位面（4b面）は、庄内式期にあたるが、出土遺物は少ない。4b面は遺構が少なく、確認できたのは、中央部での小穴３基のみである。



第4図　遺構平面図（古墳期・突帯文期、1/150）


小穴52
小穴54
小穴58
小穴59・60
溝143
土坑151
小穴144
小穴160
小穴147
小穴153
小穴161
溝148
0
1m

第５図

4 a面（第5図）

調査区東部に西側へ傾斜する落ち込み127が蛇行する。中央部で幅8.5 mの落ち込み45・139が東西方向にこれを切断する。東側高所部には、小穴・小溝・落ち込みが散在する。東部中央には西から延びる溝51が東へ走る。幅0.27～0.42 m 深さ0.11 m。落ち込み埋没後の掘削である。他に中央北寄りに溝44、南部には、土坑47がある。溝44は、幅2.1～2.2 m、深さ0.07 m。埋土中から石鏃が1点（第13図75）出土した。土坑47は、0.7×0.67 m、深さ0.2 m。この面で地震による墳砂痕が南北から北西～南東にかけての方向を中心として走る。溝51は墳砂形成後に掘削されている。北濠地区・平野川地区の各所で検出している墳砂痕のうち、本調査区付近のものについては、この時期とみられる。

4 b面

中央部のG区78ライン付近で、径0.11～0.28 mの小穴が3基集中する。

**c．飛鳥・奈良時代～平安時代初葉**（3 a・b・c・d・e面）

上位面（3 a面）から下位面（e面）まで5面検出した（第6、7図）。

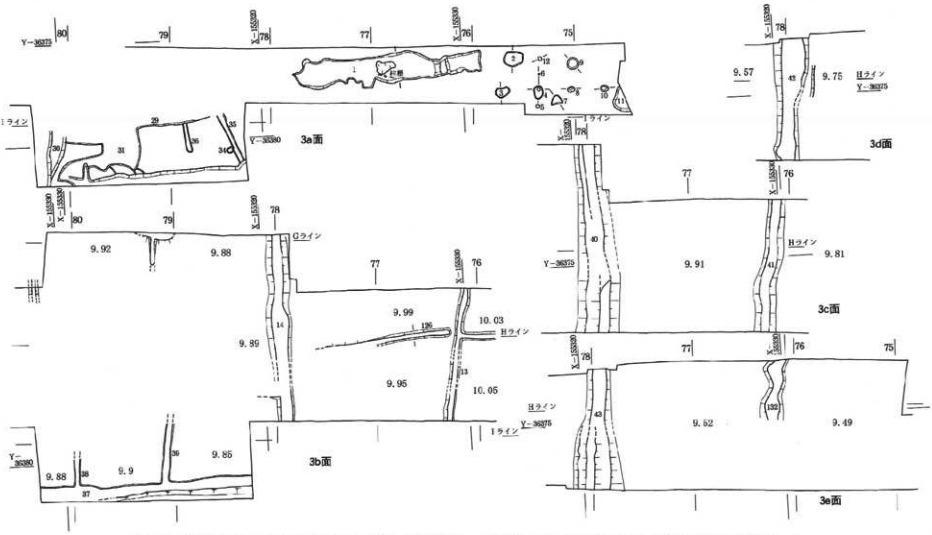
最上位の1面（3 a面）と下位面の4面（3 b・c・d・e面）とで、遺構の性格を異にする。最上位の3 a面には、溝・小溝・柱穴・小穴などがある。下位面の3 b・c・d・e面）では、大小の畦畔が検出された。とくに調査区の中央を東西に走る大畦畔は、ほぼ平面的な位置を保ちながら層位を変えながら連続する。小畦畔の一部でも、同様に同一平面位置で検出されるものがある。

3 a面

調査区の橋梁部基礎西部と南部西側で確認された。橋梁部では小溝2条と小穴の他、落ち込みがみられるが、遺構の性格ははっきりしない。南部の北側では、南北方向を採る幅1.4 m、深さ0.3 m、長さ9.3 mの溝が1条検出された。第1調査区でも検出されている。溝内中央で面取りを施された柱根1本が出土。掘り方は柱径に近い大きさである（図版4）。南端の一角を柱穴・小穴・土坑が占める。これらの柱穴・小穴群のうち、いくつかは直線上に並ぶが、建物を復元するには不足する。あるいは柵列の一部かもしれない。ここでは柱穴列として報告する。東西、南北の2方向が認められる。ほぼ直角方向を採る。柱穴間は南北1.6 m、東西0.75～0.85 mを測る。

3 b面

灰白色～明緑灰色系粘土をベースとし、面上に畦畔を造成する。微砂～細砂に覆われる。大畦畔は調査区中央部を東西に走るもの（大畦畔14）と橋梁基礎西部を南北に走るもの（大畦畔37）とがある。両者は調査区外で交差するとみられるが、西接する北濠第9調査区での有り様からすると、東西大畦畔は交差点から西には続かない。しかし、南北のそれは南に延び、西から続く小畦畔が取りつくと推定される。方位はほぼ東西南北に一致する。大畦畔14は幅上端幅0.55 m、下端幅0.85m、高さ0.06 m、長さ9.5 m以上を測る。大畦畔37は、幅0.75 m、高さ0.08 m、長さ10.5 m以上を測る。大畦畔には、上端幅0.21～0.30 m、下端幅0.32～0.45m、高さ0.03～0.04 mの小畦畔が取りつく。小畦畔の遺存状況は良くなく、田面の形状や大きさを知ることができる所は




第6図 遺構平面図（平安時代初葉～飛鳥・奈良時代、1/180）図中の数値は田面の高さを表す(単位はmm)

少ない。G76区で小畦畔での水口を1箇所検出した。現状では11筆以上を数える。東西大畦畔を境に北に低くなる。この面の水田は、面的な対応を押えることができるものであり、田井中遺跡の北東に広がる志紀遺跡で検出されている水田との対応関係を求め得る可能性がある。

3c面

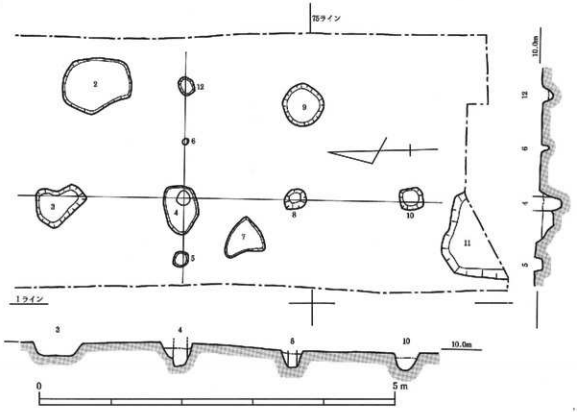
3b面の東西大畦畔14の直下で検出した大畦畔40と3b面の小畦畔13の直下で検出した小畦畔41の2条がある。他には畦畔はできなかったので、田面の形状などは不明である。大畦畔40は、上端幅0.5～0.55m、高さ0.62m（南側）、0.15m（北側）、長さ9.4m以上を測る。北側は段を以て下がる。小畦畔41は、上端幅0.38～0.4m、下端幅1.05m、高さ0.14m、長さ6.7m以上を測る。両畦畔間は、約8mで、この区域の北と南は低くなる。

3d面

3c面の東西大畦畔40の直下で検出した大畦畔42の1条のみで、この畦畔を境に北の田面は低くなる。上端幅0.55m、下端幅0.9～1.2m、高さ0.04m、長さ6.1m以上を測る。

3e面

上位から連続する東西大畦畔43と3b・c面の小畦畔と平面的に重なる畦畔132の2条が検出された。大畦畔43は、幅1.9～2.5m、高さ0.22（南側）、0.216（北側）、長さ6m以上を測る。南側は段を以て下がる。畦畔132は、上端幅0.42～0.78m、下端幅0.78～1.25m、高さ0.17m、長さ2.7m以上を測る。大畦畔の北側は上位面と違い、少し高くなり、畦畔132の南も低くなり、全体に南へ下がる。




第7図　小穴列（3a面、H74・75区）（1/50）

**d．平安時代中期**（2a・b面）（第8図）

上位と下位の2面を検出した。両面とも大溝・溝・土坑・柱穴などで構成されている。遺構群の状況から、3面の水田とは違い、畑の様相を呈する。

2a面

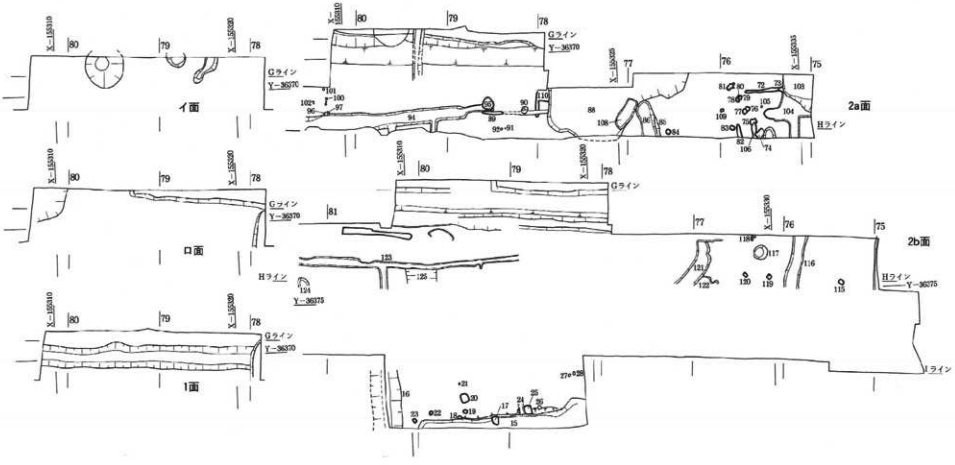
現平野川による掘削を免れた調査区東部で遺構が検出された。橋梁基礎東部で南北方向の大溝が1条、その西側では、北部で溝・小溝、南部北寄りで、大土坑、南端部で小溝・小穴が多くみられる。南北溝178は、幅0.85m以上、深さ0.07m、長さ11.2m以上を測る。現在の耕地に残る条里型地割りから推測される南北坪境の線上に重なることから、坪境溝の可能性がある。溝178の西側にある溝94は、幅約0.8m、深さ0.2mで、大溝と走向を少し違えながら北側へも延びる。溝94の南端で土坑95が後出して重複する。0.6×0.65m、深さ0.24mで埋土中より、黒色土器が出土した。近接する柱穴90は0.38×0.28m、深さ0.3mで約0.15mの柱痕が確認された。大土坑88は調査区東に延びるので全体の規模は不明であるが、現状で、南北7.6m・東西3.3m以上、深さ1.7mを測る。埋土は青灰色微砂質粘土～微砂質土である。南端部の小溝・小穴群は全体にまとまりはないものの、小溝のうち、東西南北の方向を採るものがある。小溝は幅0.15～0.24m、深さ0.1～0.17m、小穴は径0.14～0.3m、深さ0.07～0.1mを測る。小穴群は大きさなどから、杭もしくは柵などでなく、簡単な構造の建物、野小屋程度のものを考えることもできる。

2b面

調査区東部および橋梁基礎部で遺構が検出された。橋梁基礎東部で南北大溝が1条、その西側で小溝、橋梁基礎西部で東西溝・段・小穴、南部で溝・土坑・柱穴を検出した。南北大溝は、幅1.4m、深さ0.3m、長さ11.6m以上を測る。西に接して畦がつく。上端幅0.57mを測る。北半部は溝179が重複し、不明である。この溝内から瓦器（30）が出土した。既往の調査でも大溝と畦が並走する状況で出土しており、連続するとみられる。小溝は南北方向を採る。小溝123は幅0.3～0.6m、深さ0.13m、南北に12m以上延びる。一部で西に分岐する。橋梁基礎西部でで検出した東西溝16は調査区外にかかるため、大きさは不明だが、幅約2m、深さ0.3mと推定される。段の可能性もある。調査区東部まで延びずに西部で終わる。調査区西端縁を緩く南東に延びる段15がある。深さ0.48mで、第1調査区で検出した段に接続するとみられる。段の東、上部には小穴が数個見られるが、まとまりはない。小穴17は段埋没後に掘削されたもの。同程度の小穴については、小型のそれより後出すると見られる。南部で検出された溝116は幅0.75～0.8m、深さ0.16m。土坑117は0.7×0.72m、深さ0.34m。柱穴120は掘り方0.25～0.3m、深さ0.65m以上、径0.08×0.11mの柱根が残る（図版4）。柱穴119は掘り方0.24～0.27m、深さ0.54m、径0.12mの柱根が残る（図版4）。柱穴115は掘り方0.26×0.38m、深さ0.09m。

**e．平安時代後期**（1面）

橋梁基礎東部で遺構が検出された。2a面の南北大溝に重複して、大溝176が検出された。幅1.1～1.29m、深さ0.3m。埋土は青灰色～明緑灰色微砂質粘土。第1調査区の大溝と連絡す




第8図 遺構平面図（中世～平安時代中期、1/200）

る。この大溝埋没後、北半部で、上端幅2.8m、下端幅3.2m、高さ0.15mの大畦畔が東西に走る。南端も東西の畦畔がある。

**f．中世　（イ・ロ面）**（第8図）

第6調査区では、第1面から上位については旧耕作土面を含めて5枚の面を想定することができる。今回、中世に属する2枚の面を平面的に調査した。従来の調査では中世以降に属する面については、調査条件や遺存状況により差があり、相互の面対応も十分できていない。ここでは、仮称したイ・ロの2面について報告する。いずれも橋梁基礎東部で遺構が検出された。

イ面

OP11mで精査したが、この面での明確な遺構は検出できなかった。東壁面付近で検出した井戸・土坑は上位面からの掘込みである。井戸168は径約2,19mの円形の掘り方に樽を2段に組み、その上部を矢絣文の入った平瓦を円形に組み、井戸枠としている。井戸枠径0.75m、高さ0.3mを測る。樽は径0.68m、高さ0.7mである。調査は工事の掘削底面（3c面付近）までとした。樽の外面に墨書があるが、判読できていない。

ロ面

OP10.8m付近で検出した。東部壁面と南壁面で畦畔172.173を検出した。いずれも調査区外に広がるので、規模などは不明である。段の可能性もある。

4．出土遺物（第9～16図）

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代晩期から中世に及ぶ。突帯文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、木製品、種子類などが出土している。整理箱で14箱を数える。量的には他の調査区に比べて少ない。

また、既掘の調査で出土した資料のうち、主に弥生時代前期に属するものをあわせて報告する。

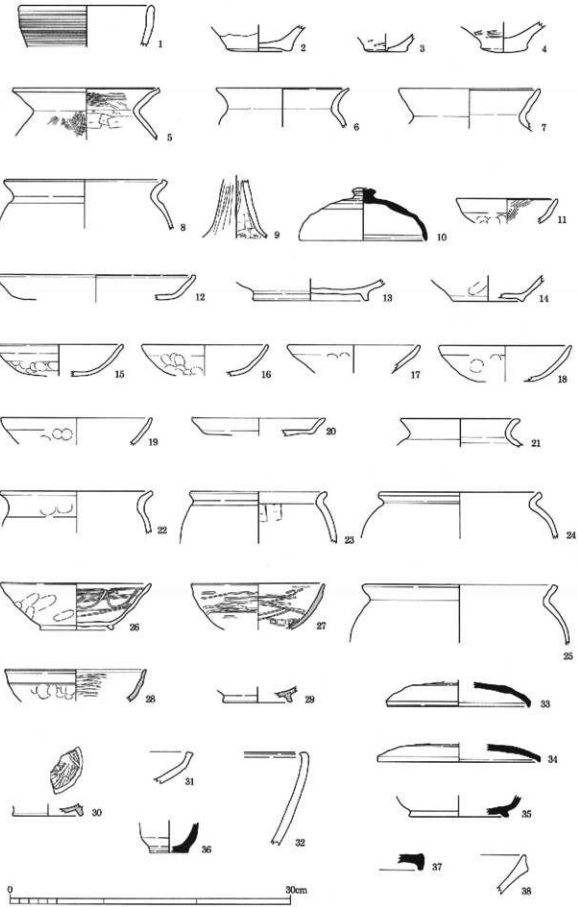
**a．土器**

突帯文土器（2・39～42　43・44）（図版5）

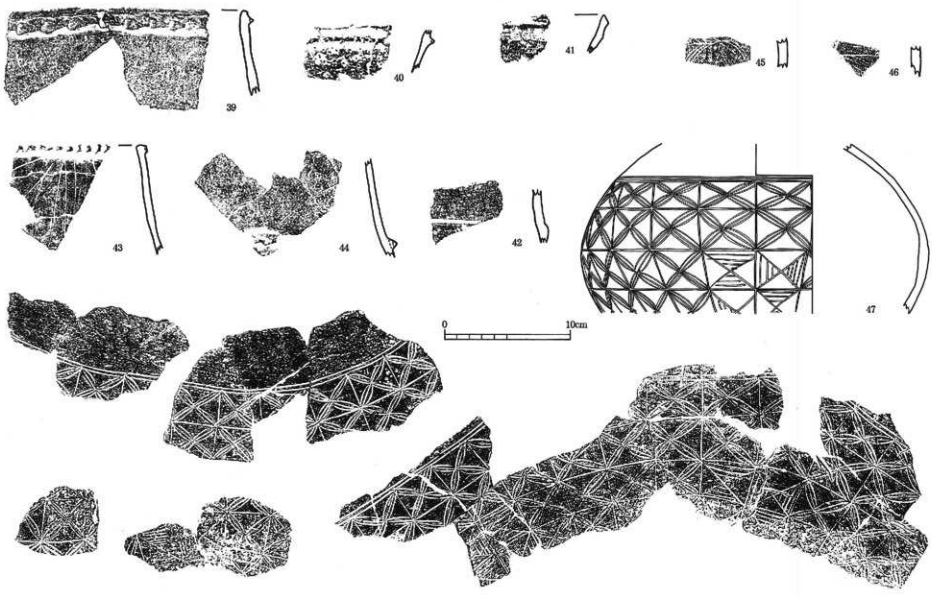
2条突帯をもつ深鉢（39・40）のうち、39は口縁端部を面取りし、上端よりわずかに下に突帯をつける。D字形刻み目を加える。40は肩部突帯に小D字形を付す。41は浅鉢口縁上端部に突帯を付す。胴部はヘラケズリで成形する。42は壷の肩部で1条の沈線が巡る。43・44は2条突帯の深鉢で、同一個体片。口縁上端に接して突帯を貼りつけ、D字形刻み目を密に付ける。突帯間にはヘラ描きの文様で飾る。4条の縦線を軸にして、上方から下方に左右へ振ひろがりの線を刻む。2は底部片。底部外面をヘラケズリにより蛇の目状に凹ませる。

弥生土器（1・3・4・45・46・47）（図版5）

壷（45・46・47）47は弥生前期の壷で胴部を木の葉文で飾る。口頸部と底部を欠く。頸胴部界に沿って2条の沈線を引き、胴部下半へと1条沈線を平行して3本引く。頸胴部界の2条沈線から縦に直交する1条沈線を引き、それによってできた方形区に木の葉文を描く。胴部中央の最大径部位に1条。現存では、4段に重ねた構成をとる。文様は欠けている底部に続くため、不


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
26
27
25
28
29
33
34
30
31
32
35
36
37
38
0
30cm

第9図 土器 (1/4)




第10図　突帯文土器・木葉文土器（1/3）

明な点が残るが、現存する破片から復元してみると、胴部下半にもう1段入る可能性はある。文様帯下半部(胴部下半)の2段の一部で、木の葉文に替わって方形区内を対角線で4分し、相対する2区画内を平行線で埋める文様をつくっている。この相い接する単位方形区4つで、互いに接する部分には、平行線で埋めた部分を避けるように配置している。胴部中央の最大径は27.9cmと復元され、円周87.6cmを単位方形区で割ると、約21個で廻る。均等に配置されたものとして、接合できた破片からわかる芯芯間の6コマで割ると3.5となり、均等配置は不可能になる。他に同様の文様が1組みあることから、3組みあるいはる4組みで配置したものとみる。いずれにしても、胴部を4段に木の葉文で飾り地紋とする装飾性豊かな壺である。

口縁部が内湾する鉢(1)は体部外面を2段に構成された櫛描き直線文で飾る。甕の底部片(3・4)は外面にタタキ目成形痕が残る。

上師器

甕(5・6)は庄内式、甕(7・8)は布留式に属する口縁部片。高杯(9)は脚柱部片。

飛鳥・奈良期　杯(11)は内面に2段の放射状暗文を付す。飛鳥Ⅲ期。(12)は内湾する口縁端部を丸く収める。底部外面はヘラケズリの後ミガキにより仕上げる。(13)はしっかりした高台をもつ。(16)は体部外面にユビ押さえにより成形した痕をもつ。ともに仕上げのヨコナデは体部の中位にまで及ぶ。8世紀中葉。

平安期　椀(14)は断面三角形の貼り付け高台をもつ。杯(15)は体部外面にユビ押さえにより成形した痕を残す。口縁部外面に強いナデを施し、体部からわずかに外反させ口縁部を形成する。杯(17～19)は体部外面にわずかにユビ押さえ痕を残す。(17)は口縁端部内外面約1.5cmに煤が付着する。皿(20)は底部から斜め上方に短く伸び、端部を丸く収めるもの。甕には体部をやや丸く張るもの(24・25)と、そうでないもの(22・23)とがある。口縁部は各種各様の形状をもつ。鉢(31・32)はともに口縁部のみ遺存。31は斜め上方に伸びた浅い体部に小さく内湾する口縁部をもつ。口縁端面は凹線状に窪む。(32)は斜め上方にきつく内湾気味に伸びた深い体部の先端が丸く内側に収まり口縁部を形成する。

黒色土器　杯(26)は内面黒色。体部内面はよこ方向のヘラミガキの後、暗文が輪花状に反時計まわりで施文される。外面にはユビ押さえ痕が残る(図版6)。

瓦器　杯　底部を欠くもの(27・28)と高台部片(29・30)がある。

須恵器　杯蓋(10)は天井部に撮みが付く。6世紀後半。杯蓋(33・34)は端部が尖り気味におわる。杯身(35)は高台をもつもの。瓶子(36)は体部下半のみが残り、上部を欠く。体部下半は時計まわりにヘラケズリで成形する。焼成が甘く、軟質である。

甕(37)は大甕の口縁端部片。

瓦質土器　摺り鉢(38)の口縁端部片。

**b．木製品**

柱根(48・49)(48)は最大径10.8cm、芯持ち材を粗く面取り加工したもので、先端部は小さく加

工している。現存長39.3㎝。G76区、柱穴120出土。(49)は最大径12.2㎝、現存長28㎝。(48)と比べて、格段に丁寧な加工をする。柱穴底面にあたる一端はほぼ平らになるまで削り込まれ、側縁は多面体に面取りされている（図版6）。H76区、溝1(3a)出土。

鋤（50）全体にかなり磨耗し、欠損部分が多いので全体の形状は不明である。図の上部が軸部となり、緩やかなカーブで刃部するものとみる。右側辺あたりを軸とした対称形となるとみられる。現存幅10.3㎝、現存長32.9㎝（図版6）。H77区、3a面ベース土以下出土。

槌の子（51）径6．6～約7㎝、長さ26．7㎝の円柱の中央部を径5．5㎝弱長さ7㎝に削り込み、両端に約10㎝の円柱部を作り出す。円柱部の各側縁は多面体に面取りを施す。端部は尖り気味に削り込まれている。G76区南部、2a面ベース土出土。

石斧柄（52・53・54）縦斧の直柄の未成品である。いずれも頭部・握りの形状をほとんど備えているが、頭部の装着孔はあけられていないし、細部の調整・仕上げができていない。制作工程のなかで、完成に近い段階のものといえる。(52)は長さ57.4㎝、幅8.3㎝、厚さ6.7㎝、径3～4㎝、材質はウバメガシ。(53)は長さ61㎝、幅11.5㎝、厚さ6.4㎝、径4.5～6.2㎝、頭部の一部に樹皮が残る。製作工程としては(52)より少し前の段階である。(54)は長さ31.8㎝、幅7.5㎝、厚さ5.7㎝、径3.2～4.1㎝、先の2例より全体に加工の程度が進んでいない。長さが短く、小型品である。

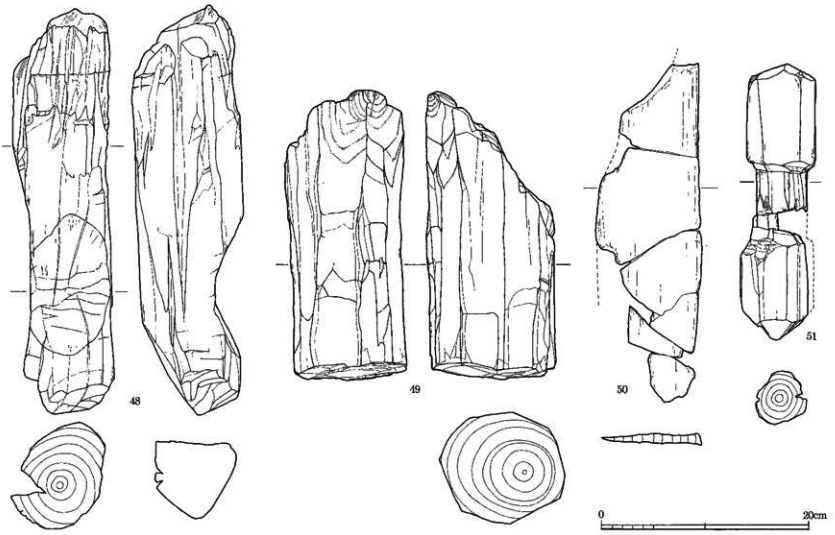
横槌（55）全体に磨耗しており、痩せている。扁平な断面の身（敲打部）に断面円形の握りが付く。全長34.1㎝、身は長さ約21.5㎝、断面4.8×7.1㎝、握りは径2.9㎝。材質はアカガシ亜属。A26・27区。溝26、第2層出土。

竪杵（56）握部の中央に2箇所の節帯をもつ形態である。一方の搗き部を欠く。搗き部から握部にかけての破片と節帯部の2片として残る。搗き部～握部の残存長69.5㎝、搗き部径7.5㎝、節帯径5.4～6.7㎝（節帯中央部径3.5㎝）。B27区、溝26出土。

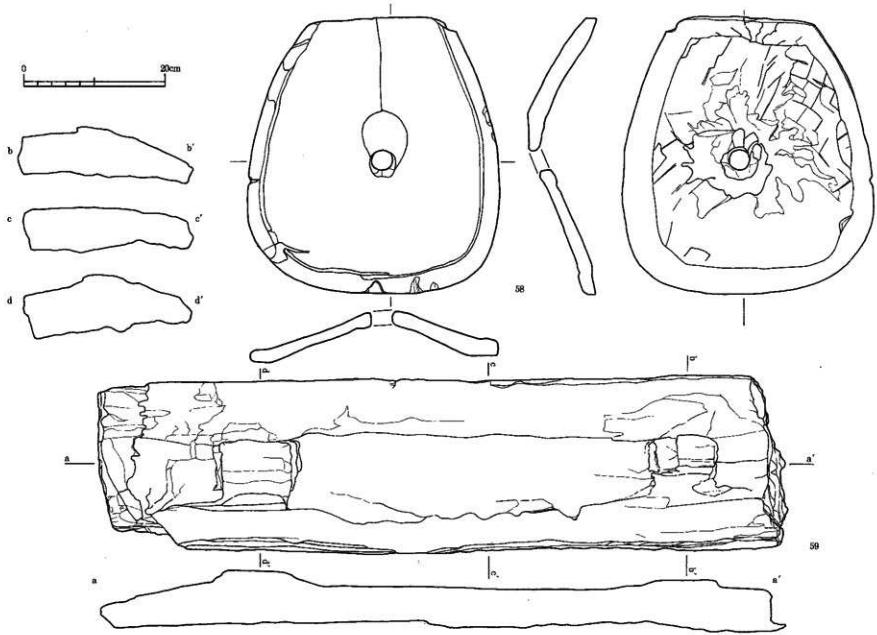
鍬（57）直柄鍬の未成品である。身の頭部左右を丸くつくる形態である。中央から頭部寄りに柄孔用の円形の隆起を設けるが、孔はまだあけていない。全体の形状はできあがっているものの、頭部・刃部は母体の素材から切断された状況を留めており、柄孔の隆起部をはじめ、他の部位でも細部加工や整形が施されていない。刃部側縁の一部を欠失する。頭部は柄孔隆起側に若干反る。幅16.4㎝、長さ30.6㎝、厚さ（頭部）2.1㎝、（刃部）1.4㎝。隆起部4.2㎝、高さ2㎝。材質はアカガシ亜属。B27区、溝26出土。

泥除（58）下膨れの不整円形を描く。断面は笠状にくられる。内面には削り込み痕跡を留める。中央頂上よりやや下方に径13㎝の円孔を穿つ。内外ともに上端の直線部を除いても外周に外面幅2.4～4㎝、内面幅1.8～2.8㎝の縁が一周する。長さ39.2㎝、幅35.2㎝、高さ9.5㎝。材質はクスノキ。

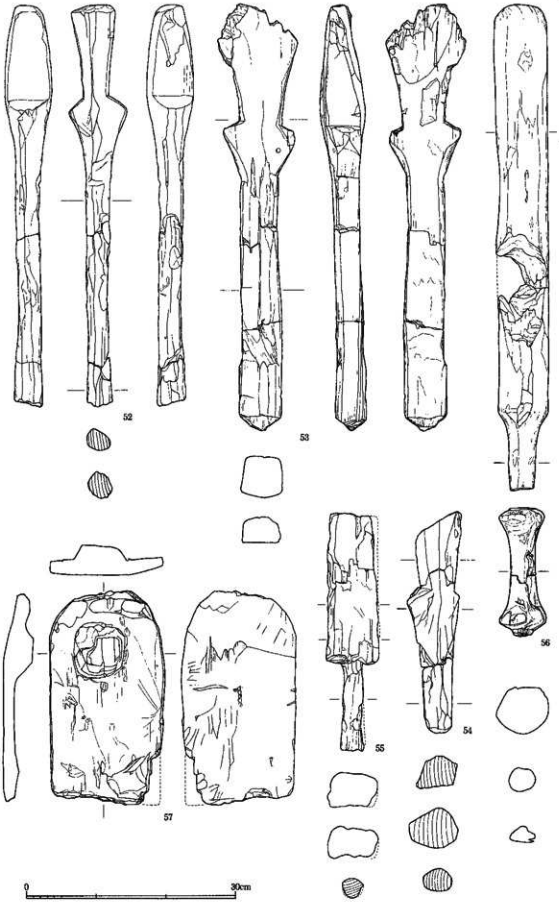
鍬未成品（59）長さ98㎝、幅24.6㎝、厚さ5～5.4㎝を測り、長方形の材の両端寄りに10～12㎝高さ1～2㎝の方形の隆起を作り出したもの。2箇所の隆起をともに長軸上に配置し作り出しているところから、この母材から広鍬類2個体分を予定したものとみられる。鍬(57)と同じか、ひとまわり大きいものが可能である。A・B27区、溝26出土。




第11図　　(1/4)




第12図 木製品 (1/5)




第13図 木製品 (1/5)

c．石器

石鏃（75）先端部と基部の一部を欠失する。凹基有茎式。大剥離面を残さず、両面を丁寧に断面は菱形。残存長6.4㎝、幅2.3㎝、厚さ0.55㎝。9.9g。サヌカイト。第6調査区H79南東部、溝44出土（図版6）。

太型蛤刃石斧（60～63）基部の一部を欠くもの（60・61・62）と刃部を欠くもの（63）がある。（60）は幅5.2㎝、現存長8.4㎝、厚さ3.8㎝、基部断面は扁円形。基部を欠損した後、破損面を利用して磨石に転用している。C77区東端北部、第4面（古墳期）出土。（61）は幅5.4㎝、現存長10.9㎝、厚さ4.9㎝、473.8g。基部断面は円形。基部が欠損した後、破損面を利用して敲き石として転用する。また基部の両面や側縁面と刃部先端にも敲打痕が残る。B30区、落ち込み45出土。（62）は幅6.6㎝、現存長10.9㎝、厚さ4.9㎝、584.1g。基部断面は扁円形。基部の両面には敲打痕が残る。基部が欠損した後、敲き石に転用したとみられる。C33区、弥生期面出土。（63）は幅7.5㎝以上、現存長9.5㎝、厚さ4.6㎝以上、473.1g。基部断面は扁円形。基部端近くにいくつか破損面がみられる。敲打痕ともみれなくもないが、先の例ほど明確ではない。C28区、溝46出上。

扁平片刃石斧（64）大きく破損した破片である。刃縁と後主面の一部と刃縁に接する側縁のごく一部残す。幅4.5㎝以上、長さ4.9㎝以上、21.5g。刃縁は直線でなく、側縁近くで丸くなる。D9区、古墳・弥生期包含層出土。

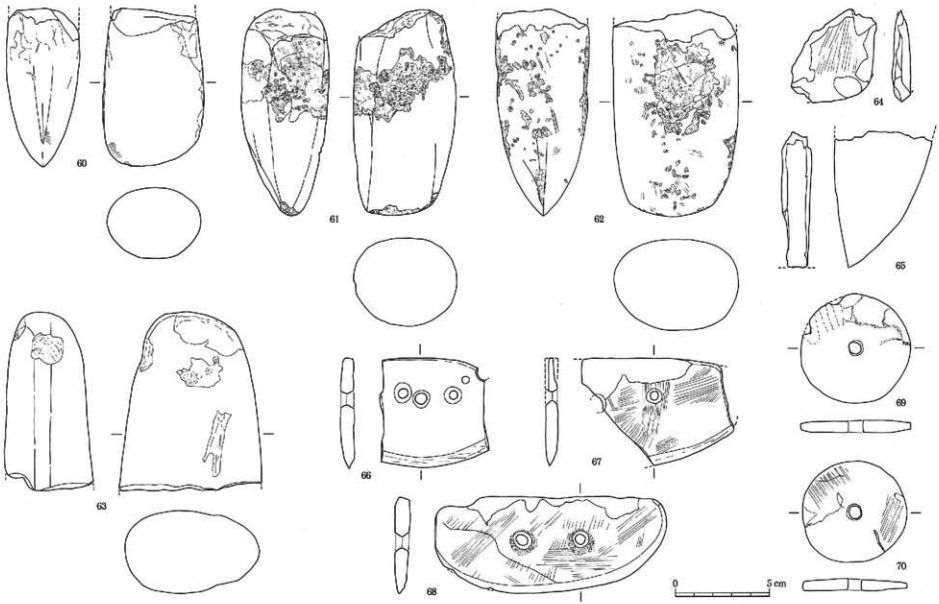
柱状片刃石斧（65）刃部片である。側縁方向に走る節理面で割れ、刃縁約1㎝幅のみ留める。現存長84.7㎝。材質は緑色片岩。A32区、暗灰色粘土3上層出土。

石庖丁（66～68）外湾する刃部と背面が直線から両端に緩く湾曲する形態のもの（66・67）と背部が直線で外湾する刃部が端部で丸く、ないし真直ぐに接続する形態（68）がある。前者は両面に刃縁を作り出し、両刃といえるが、両面から作り出す刃縁の稜は厚みの片方に微妙に寄る。66は両端部を大きく欠き、体部中央を残す。紐孔は貫通したのが4箇所、空けかけのが1箇所残る。A33区、暗灰色粘土3上面出土。（67）は体部左半と右端部を欠く。紐孔は2箇所残る。D93区、灰色粘土3出土。（68）は部分的に損傷たところもあるが、ほぼ完形である。紐孔は中央よりやや背部寄りで、ほぼ対称に穿つ。幅5.1㎝、刃部幅12.2㎝、厚さ8㎜、紐孔5～6㎜。D51・52区、溝6出土。

石製紡錘車（69～70）69は径5.8㎝、厚さ6.5㎜で、中央に6㎜の孔を穿つ。周縁部の一部を欠く。材質は緑色片岩。D39区、弥生期面出土。70は径5.4～5.55㎝、厚さ6㎜で、中央に6.5～7.0㎜の孔を穿つ。一部を損傷するが、ほぼ完形。材質は緑色片岩。D45区、上坑64出上。

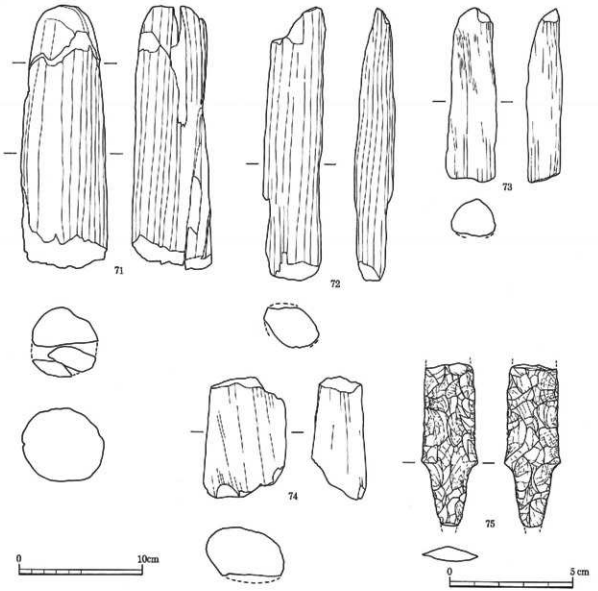
石棒（71～74）（図版6）

4点出土している。いずれも欠損している。径3.5～7㎝で、円形あるいはそれに近いもの（70・74）と径4～7㎝で、円形あるいはやや扁平な印象を受けるもの（72・74）の2種がある。材質はすべて結晶片岩であるが、前者のやや大型の方は岩質が粗質で節理に沿う割れが目立つ。後者の




第14図　太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・石庖丁・石製紡錘車（1/2）

小型の方は比べてより緻密である。(71)は基部側が欠けるが、頭部ほぼ残っている。残存長21.1cm、径7cm、断面円形。H・I54区、溝96下層出土。(74)は頭部・基部ともに欠失。断面形も一部欠くが、やや扁平な円形を示す。外面の一部に炭化物が付着するが、火を受けたものか。GH35区、溝84中層土器群中出土。72は頭部を欠失するが、基部が残る。残存長 21.9cm。断面は欠損するため径は不明だが、長軸4.7cm、短軸3.5cm、の楕円形をとると推定される。E82区、土坑121出土。73は基部側が欠失。頭部の一部が残る。残存長13.9cm、推定径約3.5cmのほぼ円形の断面。D49区西部、暗灰色砂質粘土B出土。



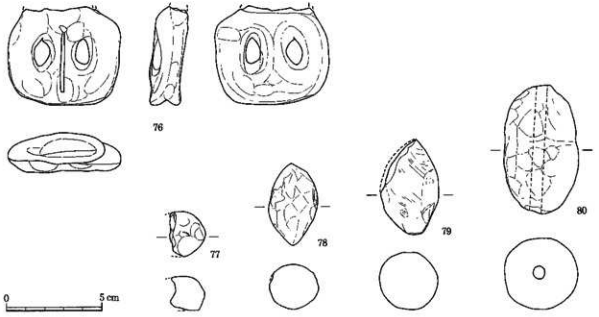

第15図 石棒 (1/3)・石鏃 (2/3)

d．土製品

土偶（76）幅5.9㎝、現存高5.2㎝、厚さ1.7㎝、角が丸みをもつ四角形を呈する粘土板で上部を欠く。前面を左右にやや丸みをもたせ、背面はこれにあわせて凹ませている。底部を少し幅広くして、底面を筋状に凹みをつける。これによって中位より下がった位置から外反り気味になるが、直立する。前面には中心に縦にヘラ描き線を1条きざむ。その左右に杏仁形に近い孔を穿つ。この土偶は足部を表現せずに胴体より上位のみを造作したもので、両側に双孔をあけ、両腕部を表現するだけで、他の身体的特徴を抽象化している。欠失した上部に頭部が付くとみられる。前面中央のヘラ描き線は正中線を表現しているとみられる。前面には、わずかながら粘土の起伏がみられる。中央下寄りでは小さな膨らみがあり、腹部の表現とみられる。上の方でも膨らみがみられるが、乳房を表したものかどうか不明である。本例に類似した土偶は近畿地方を中心に近年増加している。本例にもっとも近似しているものとして愛知県豊川市麻生田大橋遺跡出土例がある。A49区北西部弥生面上出土。河内系胎土。54.6g。

投弾（77～79）ラグビーボール形の土製品。78は長さ4.3㎝、径2.4～2.6㎝、19.3gで完形。C33区、弥生期包含層出土。(79)は長さ5㎝、径3㎝、34.0g、一部欠失する。(77)は径2.4㎝以上1／2弱残存とみられ、7.8g。B30区、落ち込み45出土。他に同形のものが1点ある。1／3強欠失。長さ3.6㎝以上、径2.8㎝以上、16.7g。C81、C・D82区溝124出土。

土錘（80）長さ6.9㎝、径3.8㎝の楕円形を呈する。外面にユビによる成形痕が残る。中央長軸方向に径6㎜の孔を穿つ。B30・31区、溝20上層出土。




第16図　土偶・土製投弾・土錘（1/2）

# 第３章　まとめ

前章では、今回調査した第６調査区で検出した遺構について、個々の遺構に説明を加えながら、各遺構相互の関係や性格についてふれた。本項では、さらに隣接する既掘の調査成果をふまえて、遺構群としての性格を明らかにしておこう。

**突帯文期**（第５面）（第17図）

今回の調査区を含めた一帯は、田井中の北濠・平野川地区のうちで、突帯文期遺構の集中する地域である。環濠集落のある地域と比べると、遺構・遺物の量は少ない。遺構としては住居址・土坑・柱穴・溝等である。小穴は全体に散在するが、遺構の疎密の点からみると、北西寄りに集中する群と北東寄りに密度の高い群に分かれる。このうち、より濃密な遺構と出土量を誇るのは、北部西寄りの遺構群である。方形の住居跡・土坑群を中心として、遺構面の層序や遺構の重複から４期に分かれる。遺構は20～30ｍの範囲に大小の溝や柱穴や小穴群が広がる。北側にに展開するとみられる。これに比べて今回の調査区を含む東部は、北東から蛇行しながら走る幅0.4ｍの溝の周辺に柱穴．小穴群が散財し、居住区の外縁の様相を呈している。しかし、南へ延びる落ち込みは東側が高く、分布密度は低いながらも、溝・小穴が検出されていることから、西の一群とは別に居住区を形成する可能性がある。この間には幅20ｍ以上の谷が、南東に広がる。これは、先の遺構群よりもさらに古く、これが埋没してから、突帯文集団の活動が、本格化する。船橋式期の段階で突帯文集団がこの地に進出してきた頃からあったものである。

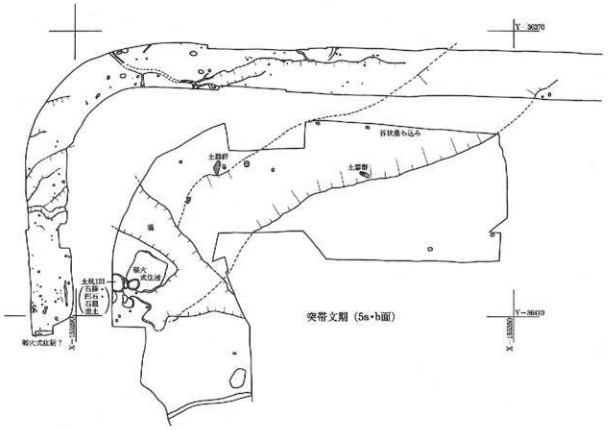
**古墳時代前期～中期**（第17図）

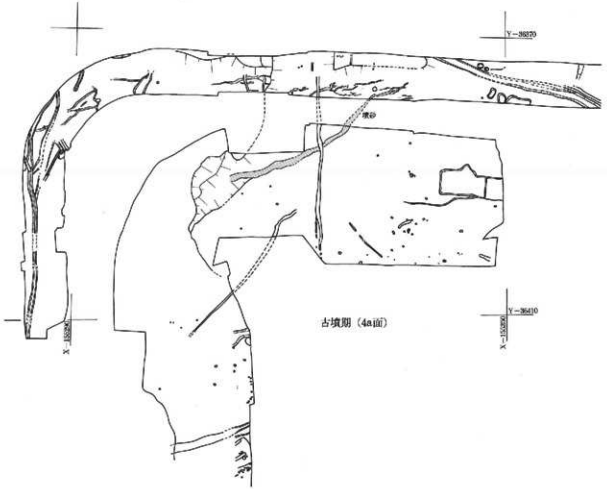
庄内期（４ｂ面）

面的に遺構を検出したのは、今回の第６調査区の小穴くらいで、近接する調査区でも、当該期の遺構は見つかっていない。約220ｍ上流側では、水田が展開する（80ｍ以上の広がりをもち、杭跡、稲株痕が部分的に残る）ほかには、溝・小穴・土坑が点在するだけで、居住地については不明である。

布留期（４ａ面）

今回の調査区も含めて近接調査区では、幅0.5ｍの比較的長い溝が走るのを特徴とする。それに土坑・小穴群が散在する。建物・柵などを構成するほどのまとまりをもたない。ただ、南西部付近では、他よりもやや密度が高く、居住域に近接しているものとみられる。平野川地区の西端部では、井戸と考えられる大型土坑・溝・小穴などが検出されており、居住区の一角を占めると見られる。その西には過去の調査で湿地状の自然地形を確認しており、遺構は北に展開するものと思われる。上流側では、水田が広がり、面上にはヒトや動物（偶蹄目）の足跡．杭痕．稲株痕がある。さらに上流では、木樋が出土している。これは丸木を半裁し刳り貫いた構造のものである。

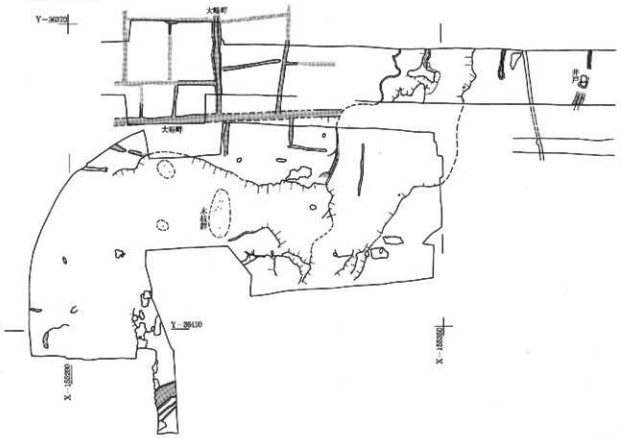



第17図　突帯文期・古墳期遺構（1/500）

**飛鳥・奈良時代～平安時代初葉**（3a・b・c・d・e面）（第18図）

3b・c・d・e面は、調査地全域が水田として利用されると推測される。いずれも挟長な調査区のため水田畦畔による田面の広がりをとらえるには、不十分である。各所で、大畦畔・小畦畔・足跡・鋤跡など水田関連遺構が検出された。しかし、畦畔の広がり・繋がりについてはわからない。一定程度水田の形態を推測できたのは、今回の調査区周辺の3b面だけである。しかし、南に向かって10数mピッチで小畦畔が東西に走ることから、第6調査区で推測した一筆面積20～40㎡あるいはより大きな60～80㎡くらいの水田が広がっていると推測される。南に行くほどピッチも大きくなることから全体に北ほどには自然地形による起伏の制約を受けず、水田の造成ができたものとみられる。大畦畔には、上流側の第3調査区で、3c・d・e面での南北大畦畔の重層がみられる。また、今回の調査区では、3b・c・d・e面での東西大畦畔の重層がみられる。ともに方向が東西南北の方位に沿っている点に注意される。とくに第3調査区の大畦畔は条里型地割の坪境線に沿っている点が興味深い。遺構面の時期同定については、明確な決め手に欠くが、3b面で検出した井戸の時期が銭貨（富寿神宝）から平安時代初葉をしめすことから、3c面以下については、少なくとも奈良時代以前に遡るものといえる。また、微量ではあるが、飛鳥期に属する土器も散見され、第3層の下部層の時期について上限を示唆するものと見られる。河内平野のなかでも比較的早くから大規模開発が着手され、以降も営々と経営されていったと推測されるが、具体的な様子を知るには、資料不足である。




第18図　平安時代水田（3b面）（1/500）

3b面を覆う微砂～細砂層をベースとする遺構面には、下位層で検出された水田畦畔と違って、溝・柱穴・小穴などが掘られる。微砂～細砂層が場所によって一定の厚みをもつところもあるが、薄いところ、欠落するところもあって、遺構の検出されたところが限られる。今回の調査区では、柱穴・小穴によって構成された、野小屋的な軽易な建物あるいは柵などを推定されるもの、溝・小溝など直接水田を構成する遺構以外のものも出現する。しかし、第1調査区では、東西大畦畔や大土坑が検出されている。第3調査区で発見された東西大畦畔は、東西坪境に沿う点から、農道に供するものとみられる。この面での遺構の在り方は、田井中での土地利用に変化が現われてきたことを示している。

**平安時代中期**（2a・b面）

この段階での遺構の様相は、条里型地割と一致する地割を基礎に整然と耕地面を区画し畠を造成している点にあらわれる。前代の3面段階から耕地の整備を一段と強力に推し進めてきたとみられる。耕地に残る自然の起伏を地割り方向に沿って段状に造成することにより、一筆耕地内の有効面積を広げ、作業性を高めている（2b面）。今回の調査区付近にみられるように自然地形に制約された方向に段を残すものが一部であるものの、方格地割に則った段を形成している。これには南北をはじめ東西に設定された坪境線を基本に耕地の割り付けが行なわれている。検出された南北坪境溝は、西側に畦を設け、道としての機能をもつが、今回の第6調査区でも、この延長線上で検出しており、途中の65区で検出した東西大溝は現存条里型地割から坪境溝とみられる。この坪境線内部は、比較的大きな溝とともに、小溝が縦横に走っており、畝溝として何度も耕作されたことを示す。

ついで、2a面段階でも坪境線を基準とした耕地形態で、畠地が続いたものと思われるが、南北坪境溝も明瞭さを欠く。今回の調査区で検出された大溝も上位遺構との重複により、規模は不明で、南端では上位遺構に破壊されたとみられるが、前代より小規模化している。坪境内部は、小溝が縦横に設けられている点は同じだが、溜池用とみられる大土坑などが掘削されている。上流側では、内部での様相ははっきりしない。G75・76区で、柱根を残す柱穴などがあるが、建物となるか、何かの施設の一部を成すか不明である。

**平安時代後期**（1面）

明確に東西南北に坪境溝を設けられる。東西方向の大畦畔が走る。49区付近で検出された畦畔は坪内の中央、半町の位置になる。北側73区では、68ライン付近の東西坪境溝から約29mの所に東西大畦畔が走る。水田としての利用で埋没する。

つぎに1面以降の土地利用の経過を記しておこう。全域で平面的な調査が実現できたのは、1面までで、上位層での調査は幾地点かにおいて中世に属する層位で行なっている。水田および畑地として耕地の経営が行なわれてきた。

最後に条里型地割の坪境付近の経年的な変化にふれておこう。平野川地区では、5箇所の地点で坪境付近の様相をとらえることができた。すなわち、下流側から、第6調査区橋梁基礎部（南北

坪境)、第1調査区(東西坪境)、第1調査区(南北坪境)、第3調査区(東西南北坪境)、第4調査区(東西南北坪境)である。加えて、坪境線からは外れている大畦畔についてもふれておく。ともに耕地造成上基準として設定されたものと考えられるからである。

第1調査区の東西南北坪境の状況をみておこう。坪境上で確実に設置されたものとしては、2b面で開掘された水路が古い。1面を最後に境界線としての意味をもつものとして畦畔へと変化する。背景に水利系統の変化を考えることもできる。東西坪境線ではどうか。ここでは、2b面になって境界線としての役割をもつ大溝ができる。後続する坪境線より南にずれる。3b面で検出された小畦畔は、境界線としての性格を担ったものとはいえない。ついで1面の大溝が設けられる。ここでも先の南北大溝と同じくこの時期を最後に境界線としての役割を畦畔へと変化させている。

## 第4章　弥生時代前期遺構群の性格と変遷

——田井中ムラの成立と展開

田井中遺跡は八尾空港北濠の調査から始まり、平野川の調査に続く一連の調査は、弥生時代の集落や古墳時代から中世に及ぶ水田や畠などの発見により、遺跡のもつ多様な様相とそれらの意義を明らかにしてきた。なかでも、弥生時代前期の集落を中心とする遺構群の検出は、河内平野での弥生社会成立とその発展を考えるうえで興味深い成果をもたらした。

ここでは、主に微地形単位に展開する遺構群を中心に、群設定をおこなった。

各遺構群については、遺構面や遺構相互の重複などから検討を試みるとともに5期に分け、それぞれの時期ごとの動向を整理した。

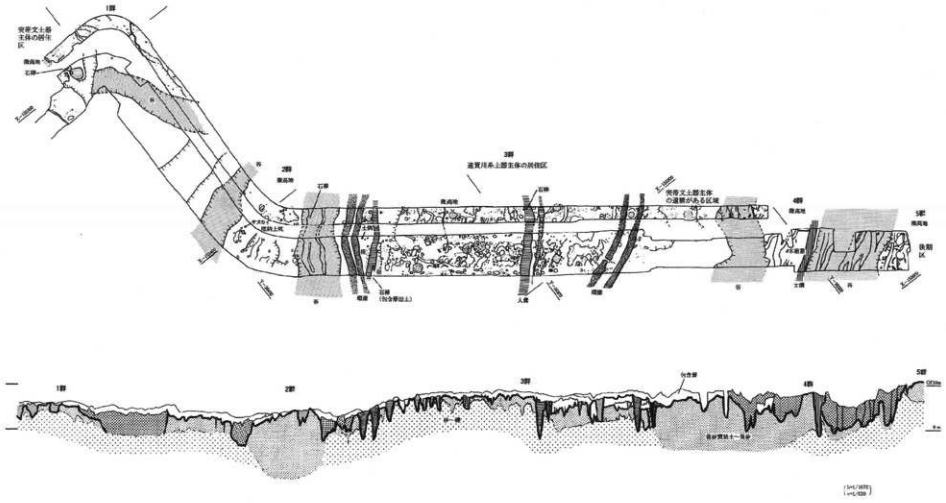
### 微地形

弥生前期面(第5面)の標高は調査区東端部で10.1m、西へ谷、微高地(9.8～9.9m)、平地(9.4～9.5m)、中央部の微高地(9.7m)を隔てて、微高地(9.4～9.5m)、谷・平地(9.3m)から微高地(9.5～9.6m)と高低差は小さいものの起伏に富む(第19図)。前期面の基盤土は微砂～微砂質粘土で、その下には砂レキ層が堆積している。この砂レキ層は地点によって、層準に変化がある。とくに中央部の微高地では、遺構基盤土が堆積せず、高位置で砂レキ層があらわれ、遺溝面に露出しているところがある。この砂レキ層上部には、縄文晩期後半代(滋賀里Ⅳ式)の磨滅した土器片がごく少量混じる。

### 遺構群の抽出

先述したように調査区内には、1m以下の小規模な起伏がみられ、これに応ずるように遺構の密度や遺物量に多寡がある。

調査区内には大きく分けて5箇所の微高地が認められ、遺構はここを中心に立地し、まとまりを見せる。この遺構の密集度(まとまり)及び、区画的性格をもつ溝などに着目して、遺構群を設定する。



第19図　弥生時代の田井中遺跡全体図

1群(突帯文期)

調査区西部の微高地上に存在する。南北60・東西40m以上にひろがり、北側から東にかけて谷状の落ち込みが検出された。

突帯文期(船橋・長原式)の溝・土坑・小穴・落ち込みなどがあり、遺構面は2面ある。遺構の分布密度から、さらに東西の2群に分かれる。西の遺構群(1－a群)は、遺構の面と重複関係から4期に細分できる。谷状の落ち込みが埋没した後、北西に接して、溝・土坑が形成され、これらの遺構が上坑群によって切られる。このうち土坑125は内部に明確な柱穴などは認めないが、少量の炭粒をふくむ浅い土坑と小穴が検出されている。以上の点を積極的に評価して、住居跡と推定する。上坑121では、土器とともに石棒・凹石・石皿などが出土した。遺構は北方にひろがり、住居跡の一部とみられる土坑も検出する。南では、小穴が点在する程度で、遺物の出土も希薄になる。

東の遺構群(1－b群)は、溝・小穴のみであるが、東に広がる様相を見せており、西群とは別に居住区を形成する可能性が高い。この付近では遠賀川系土器は遺構から出土しない。

2群(弥生時代古～中段階前半)

1群の上流側(第1図に示す平野川の南方が上流側となる。)に位置し、調査区を横断する幅約10mの谷とさらに上流側にある谷に挟まれた微高地にある。遺構面は1面で北へ緩く傾斜をもつ面上にある。土坑を中心に小穴・落ち込みがみられる。遺構は全体にまばらであるが、北東でやや密度が高い。ここからは、弥生前期古・中段階の比較的古い様相を持つ土器が出土する。また谷からは、前期の土器を中心に出土し、一部で突帯文土器(長原式)の共存がみられる。金山産サヌカイトの大型剥片が埋納た土坑が検出されている。

3群(突帯文期～弥生時代古・中段階前半)

調査区中央部の微高地上を占める。弥生前期古・中段階を中心とした遺構が密集する。この微高地上の遺構群は、竪穴式住居・掘立柱建物・大溝・溝・土坑・柱穴・小穴・落ち込みなどで構成される。各遺構は重複するものもかなりあり、数時期にわたり、形成されたものとみられる。最上流部の高所で突帯文土器主体の遺構がある地域(3－a群)と下流部側の遺構過密地域(3－b群)に分かれる。

3－a群は下流寄りで、2面ある。上流側では、突帯文土器を主体に出土する上坑・小穴が集中するが居住区を形成するかどうかは不明である。

3－b群では基本的に遺構面は2面である。主に遺構の重複関係から更に2つの群に分けることができる。

下位面遺構の3b－1群は2条の大溝・柵列・住居で構成される。大溝は幅2.5～4.5mで2群と境する谷状の凹地寄りと上流側、微高地最高所から下降しさらに緩く上昇する微地形の変換点に沿って掘られている。上流側には溝が1条併走する。下流側の方では両側に柵列が走る。

上流側の大溝からは石棒が1点出土しているほか、比較的古い要素をもつ土器が出土する。石棒は本群と2群とを隔てる谷からも出土している。

上位面遺構の3b－2群に属する遺構としては、2条の環濠、竪穴式住居群、掘立柱建物群、掘立柱穴、土坑、小穴、落ち込み、溝などがある。調査区内では、環濠を含めて、約130mを測る。検出した溝の向きから環濠の形や大きさを推定すると東西に長い楕円を描くものと仮定すれば、長い軸で約170m、短い軸で約120mくらいの規模と考えられる。大溝に囲まれた空間は、遺構密度の濃厚な居住区と推定される部分と、その外側にドーナツ状に取り巻くやや希薄な部分からなる。居住区では竪穴式住居群は西側、掘立柱建物群は東側を中心に建てられている。上流側環濠のうち、東側（集落外寄り）の溝は掘り直しがされている。また、最終の覆土はブロック土をふくむ単一の土で埋まっていることから、人為的に埋めた可能性がある。西側の溝からは多くの土器とともに、竪杵・鍬・横槌・石斧柄・容器・加工材などの木製品がイノシシの下顎骨や樹木片とともに出土した。木製品には未完成品、加工材が多くあり、出土状況から、木器の保存あるいは貯蔵の機能を有していたことも考えられる。これは溝が土橋状の切れ口をもち、水の流動性がない点からもこれを支持する。中央に位置する竪穴式住居2棟は近接して存在する。他のものは、この2棟と対照的に周壁溝しか残っていないもので、主柱穴なども明瞭でなく、残りがわるい。1棟をのぞいて、重複しているが、ほぼ同じ位置での建て替えとみると、集落の構成に変化がみられないと解釈することも可能である。掘立柱穴はかなり検出されており、居住空間の東側あるいは、南側に多い。しかし、建物として、その位置・規模が復元できたのは少ない。出土遺物としては、土器の他、先の環濠出土の木製品に加えて弓などの、紡錘車・土錘・土製投弾などの土製品、石鏃・削器・石錐・石庖丁・紡錘車・磨製石斧などの石器、その他イノシシ・シカなどの骨、編み篭が出土している。西側環濠の内に接する地点で遺構面に近い包含層中から土偶が出土した。

4群（突帯文期～弥生時代中期）

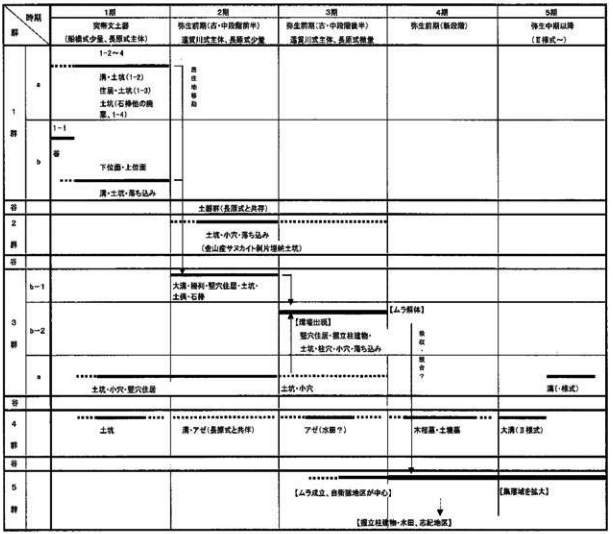
3－a群の上流側に接する谷を挟んで微高地があり、そこに1～2面の遺構面がある。北寄りでは、上位面で土壙墓、下位面では谷に接して突帯文期の土坑が検出された。南寄りでは、遺構面は1面で、木棺墓・溝がある。5群を限る谷に接して断面逆台形の大溝が1条走る。中期まで下るとみられる。

5群（弥生時代中期）

調査区の西縁部にあたる。遺構面は1面である。Ⅱ様式以降の中期に属する遺構が中心で、遺構分布密度は高い。前期の遺構と判断できるものはないが、谷の埋土中からは中期Ⅱ様式以降の土器に混じって前期の土器が出土する。

動向

つぎに遺構群相互について時間的な位置づけのなかで、それが示す集団の内的な性格や動向




遺構群の変遷(北豪・平野川地区)

を吟味し、各遺構群で生起した事象を動態として統一的にとらえる作業が必要になる。 ここでは、時期的変遷として5期に整理したものを示し、今後の検討課題としておこう。

第1期 (突帯文土器期)

人々が田井中遺跡に入ってきて、生活の基盤を置きはじめた段階である。調査区北端の1群が出現し、上流側の3a群・4群にも小規模な単位がある。

第2期 (弥生古・中段階前半)

2群・3b-1群・4群が出現し、3a群でも前段階に引き続き存続する。3a群・3b-1群では住居が検出されていて、居住単位となっている。3b-1群では大溝が微高地の縁辺に沿って走る。溝間は約70m離れ併走する調査区外に延び、囲繞するかどうか不明であるが、 何らかの区画を意図したものと考えられる。 溝に沿って部分的に柵が設けられる。土偶・石棒が出土しており、 縄文的色彩を残す時期である。

第３期（弥生古・中段階後半）

中央微高地に立地する環濠集落（3b-2群）が成立した。その内部は大きく居住区と非居住区に分かれ、居住区の東寄りに集中する掘立柱建物は倉庫群と考えられる。東の非居住区域は不定形な落ち込みにみられるように、ゴミ捨て場的な使われ方をしたとみる。検出された２条の環濠は、本来２条なのか、当初１条で後に１条追加されたか、あるいは埋没後に新たに掘削されたどうかについては現状では判断できない。４群では畦が検出されているが、水田になるかどうかは不明である。

第４期（弥生前期新段階）

本期の最初に環濠集落が解体した。この集団は５群へ吸収されたものと考えられる。５群ムラはその中心が自衛隊地区にあり、北濠・平野川地区は西縁部にあたる。４群では木棺墓、土壙墓が検出されている。

第5期（弥生中期以降）

第4期に環濠集落に遅れて成立した5群ムラが、一段とその範囲を拡大する。確実に中期、後期に続くが、後期後半代には、遺構の範囲と量を減じていく。田井中ムラの中期拠点集落としての求心力は後期前半頃からかげりをみせはじめ、後半代には急速に衰える。

最後に各遺構群の推移を変遷表のように「解釈」した根拠についてふれておこう。各遺構群を比較し時期別に配列する場合、とくに焦点となるのは、突帯文土器主体の1群と遠賀川系土器を主体とする2・3群の関係である。この両者の関係を形成した時期とそれらの集団の移動という面から検討しよう。両者が同時存在する場合、両者とも同一集団でそれぞれをその居住単位とする(A)、別の出自をもつ集団であるケース(B)が考えられる。また、両者が時期的に前後する場合(この場合、伴出する土器型式の趨勢からいって、1群→2・3群が妥当)、両者が同一集団で時期的に居住立地を移したものとみる(C)、あるいは別々の集団が時期を経て占拠したものとみる(D)などが考えれる。Aの場合、使用土器に大きな違いがあり、これを説明するのは難しい。Bの場合、先行の在住者集団と遠賀川系土器を使用する移住者集団として理解するもので、その使用土器の構成で、前者では遠賀川系土器が皆無であるのに後者では突帯文土器が少量ながら含む点が注意される。100mほどの至近距離にある集団間で相互にものの入り込む余地はあるものと考えれる。この点でケースBの可能性は低くみざるをえない。Cの場合、集団の連続性についての検証が必要である。これには、遺構・遺物で相互に比較できるものが必要であるが、現状では難しい。Dの場合、先行集団が移動するか、新来の集団と同一化したとみる。以上の検討で、Aの可能性は低いものの、他のケースではいずれも可能性がある。今回、3群で出土した土偶・石棒に注目したい。縄文祭祀の道具の出土によって、突帯文集団との連続性に根拠を与えるものである。これらの点から、Cのケースに解釈したものである。

# 第5章　田井中遺跡出土の弥生人歯について

長野県看護大学教授　多賀谷 昭

大阪府教育委員会によって発掘調査が行われた大阪府八尾市空港1丁目地内にある田井中遺跡の弥生前期の木棺墓2基から、被葬者のものとみられる歯が発見された。人骨は出土せず、いずれの歯も残っている部位は歯冠のみであるが、歯種を特定し、その計測値や摩耗状態から性別と年齢の判定を行うことが出来た。

**1号木棺墓出土の歯**

1990年12月から翌年3月の調査で人歯5本が出土している（図20）。これらの歯は、すべて上顎の永久歯であり、左の犬歯、第1、第2小臼歯、左右第1大臼歯の歯冠のエナメル質のみが残存する。重複する歯はなく、歯の大きさの比率から、これらすべての歯は同一個体のものと考えられる。

咬耗は、犬歯と小臼歯には認められず、左右第1大臼歯の舌側咬頭の先端にわずかに認められるのみである。したがって、第1大臼歯は萌出し、犬歯と小臼歯は未萌出であったと考えられる。このような萌出状態は満7歳以降12歳未満であることは確実であり、さらに、第1大臼歯が咬合を開始してからあまり時が経っていないと考えられるので、死亡時の年齢は7～8歳と推定される。歯冠計測値を山田博之ら1)の現代日本人の値と比較してみると（表1）、歯の大きさは全体に大きく、この歯の持ち主は男性であった可能性が大きい。

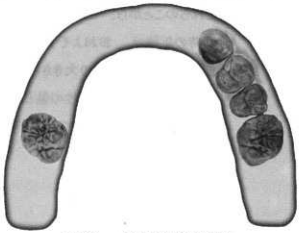


図20.　1号木棺墓上顎歯

**2号木棺墓出土の歯**

1991年10月から翌年3月にかけて行われた調査で人歯13本と多数の歯の破片が出土している。いずれも歯冠のエナメル質のみで、歯根、骨とも残存しない。歯種を同定できた13本はいずれも永久歯で、6本が上顎歯、7本が下顎歯である。

上顎歯では、左右の側切歯と中切歯、左の第1、第2小臼歯が残存する。小臼歯の歯冠はほぼ完全であるが、切歯は4本とも唇側面のみである（図21a）。

下顎歯では、左の側切歯、第1、第2小臼歯、第1大臼歯、右の犬歯、第2、第3大臼歯が残存する（図21b）。左小臼歯2本と右第2大臼歯の歯冠はほぼ完全であるが、左側切歯と右犬歯は舌側面の下半を欠き、左第1大臼歯は頬側3分の1、右第3大臼歯は舌側半分を欠いている。重複する歯はなく、歯の大きさの釣り合いや咬耗状態から、一個体分と考えられる。残りの破片になっている歯も同じ個体のものとして、その特徴や量に矛盾はない。

図21a.　2号木棺墓上顎歯

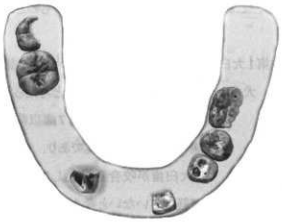


図21b.　2号木棺墓上顎歯

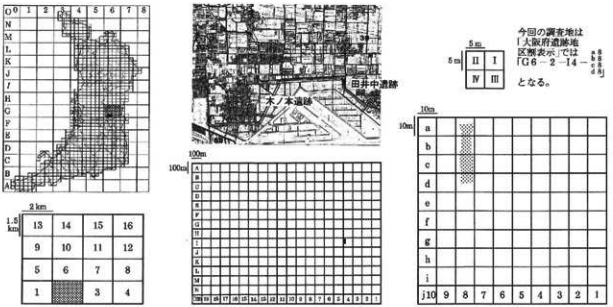
咬耗は比較的軽度で、いずれもエナメル質内にほぼとどまっており、上下顎の左第1小臼歯と下顎左第1大臼歯に直径約0.5mmの大きさの穴が開いているにすぎず、下顎右第2大臼歯の咬耗は頬側咬頭の先端付近のみにみられる。右第3大臼歯の咬耗の有無は確認できない。これらのことから、この歯の持ち主の死亡時の年齢は、おおよそ17～25歳程度と推定される。歯の大きさは、表1に示すように、現代人男性の値とほぼ同じか、それよりも大きいので、被葬者は男性であった可能性が大きい。

**文献**

1. Yamada H, Kogiso T and Liao JY: Correlation matrices for the mesiodistal and buccolingual crown diameters of Japanese and Chinese permanent teeth.　人類学雑誌 94巻4号：473-479, 1986年。

| | | | 現代日本人 | | | | 田井中 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 男性 | | 女性 | | 1号 | 2号 |
| | | | Mean | SD | Mean | SD | 木棺墓 | 木棺墓 |
| 近遠心径 | 上顎 | 犬歯 | 8.11 | 0.42 | 7.77 | 0.39 | 9.0 | |
| | | 第1小臼歯 | 7.51 | 0.39 | 7.28 | 0.38 | 8.5 | 7.8 |
| | | 第2小臼歯 | 7.05 | 0.40 | 6.87 | 0.41 | 7.9 | 7.4 |
| | | 第1大臼歯 | 10.60 | 0.54 | 10.17 | 0.46 | 12.3 | |
| | 下顎 | 第1小臼歯 | 7.47 | 0.39 | 7.16 | 0.45 | | 7.6 |
| | | 第2小臼歯 | 7.51 | 0.42 | 7.16 | 0.45 | | 7.6 |
| | | 第2大臼歯 | 11.32 | 0.65 | 10.56 | 0.65 | 11.7 | |
| 頬舌径 | 上顎 | 犬歯 | 8.6 | 0.60 | 8.08 | 0.45 | 8.6 | |
| | | 第1小臼歯 | 9.73 | 0.53 | 9.42 | 0.51 | 10.2 | 11.0 |
| | | 第2小臼歯 | 9.48 | 0.54 | 9.21 | 0.54 | 10.0 | 10.5 |
| | | 第1大臼歯 | 11.86 | 0.51 | 11.22 | 0.46 | 11.8 | |
| | 下顎 | 第1小臼歯 | 8.25 | 0.46 | 7.73 | 0.51 | | 8.1 |
| | | 第2小臼歯 | 8.65 | 0.45 | 8.33 | 0.49 | | 8.9 |
| | | 第2大臼歯 | 10.94 | 0.51 | 10.42 | 0.51 | | 10.8 |

表1. 歯冠計測値の比較(単位はミリメートル)




第 22 図　大阪府遺跡地区割表示図

調査の実施および本書の作成にあたっては、岡野ゆみ子・奥村福子・熊本昌美・柴田貴範・白木かおり・玉野冨士江・中川喜子・仲村千代江・林京子・林憲昭・本多紀子・八柄あさ代・納谷有香子・北村美紀・浅井絹江・岡恵子・河本直子・古下佳代子・河本美穂・東英美子・小門邦代・井上能子の諸氏の援助を得た。また、出土資料の整理にあたって、後藤理加・寺前直人・中村豊の各氏から教示を受けた。記して感謝します。

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | たいなか いせき はっくつちょうさ がいよう・はち |
| 書名 | 田井中遺跡発掘調査概要・Ⅷ |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 亀島 重則、多賀谷 昭 |
| 編集機関 | 大阪府教育委員会 文化財保護課 |
| 所在地 | 〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351 |
| 発行年月日 | 1999年3月 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>° ′ ″ | 東経<br>° ′ ″ | 調査期間 | 面積<br>(㎡) | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| たいなかいせき<br>田井中遺跡 | やおしこうこう<br>八尾市空港1丁目地内 | 27212 | 69 | 34<br>35<br>56～57 | 135<br>36<br>12 | 平成10年5月～<br>平成11年3月 | 290 | 平野川改修工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 田井中遺跡 | 集落 | 縄文時代晩期後半(長原式) | 土坑、小穴、溝 | 突帯文土器 | 突帯文土器主体の居住区(遺構面2枚) |
| | | 弥生時代中期 | | 弥生土器<br>石器<br>(石鏃) | |
| | | 古墳時代前期(庄内期)、前・中期(布留式期)、後期 | 溝、土坑、小穴、落ち込み | 土師器、須恵器、植物種 | 地震痕は古墳時代遺構に切断される |
| | 水田<br>畑 | 飛鳥・奈良～平安後期～近世 | 水田(大溝・大畦畔・畦畔)、溝・土坑・柱穴・落ち込み | 土師器・黒色土器・須恵器・瓦器・瓦、木杭・柱根、植物種 | 畦畔・溝は条里型地割りに規制された方向をとる。坪境南北大溝 |

# 図　　版

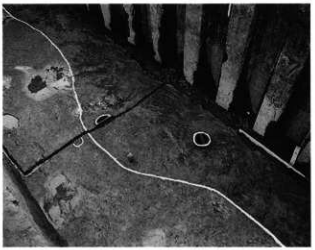
遺物出土地一覧表

| 第9図 | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | H77区、北部。古墳期包含層。H78区南部、アゼ43（3e）の下位層。 | 27 | G75区、土坑103（2a）。 |
| 2 | G77区、南端部、突帯文期包含層。 | 28 | G79区、北部、G80区、南部、鉄分沈着層最下層（東壁面）。 |
| 3 | H77区、3c面ベース土。 | 29 | G78区、上位の鉄斑沈着層下部（東壁面）。 |
| 4 | G76区、古墳期包含層。 | 30 | G79区、3a面ベース土上部層・溝埋土。 |
| 5 | H76区、溝1。H77区北部・H78区南部、3e面ベース土。 | 31 | I79・80区、南部、2a・2b面。 |
| 6 | G77区、北部、H78区南部、3c面ベース土。 | 32 | I79、南東部、溝29。 |
| 7 | H77区、3a面ベース土以下。 | 33 | G76区、南部、2a面ベース土。 |
| 8 | G77区、北端、H78区南端、溝110（2a）。 | 34 | G75～77区、2a面。 |
| 9 | H75区、3b面ベース土。 | 35 | G75区、落ち込み104(2a)。 |
| 10 | G78区、南部、3b面ベース土。 | 36 | I78区、南部、2a面ベース土。 |
| 11 | G76区、南部2a面ベース土。 | 37 | G79区、2a・2b面ベース土。 |
| 12 | G75～77区、2a面。 | 38 | G78～80区、旧耕土下。 |
| 13 | G78区、土坑95（2a）。 | 第10図 | |
| 14 | I78区、南部、2a面ベース土。 | 39 | G79区、南端、5面ベース土（溝146?）。 |
| 15 | G75区、2a面ベース土。 | 40 | G75区、北端、古墳期ベース土。 |
| 16 | H76区、土坑1。 | 41 | G76・77区、溝143。 |
| 17 | H76・77区、3a面ベース土付近。 | 42 | G79区、南端、5面ベース土（溝146?）。 |
| 18 | H75区、柱穴4柱痕。 | 43 | D26区、西端部、弥生期面。 |
| 19 | G79区、大溝179下層（1）。 | 44 | D26区、西端部、弥生期面。 |
| 20 | G79区、溝94-2。 | 45 | H68区、4a面ベース土。 |
| 21 | I78区、南部、2a面ベース土。 | 46 | H49区、南部・48区、3a面以下。 |
| 22 | G79区、大溝179下層（1）。 | 47 | H・I49区、西端・50区東部、弥生期包含層。 |
| 23 | I78区、2a・2b面ベース土。 | 第13図 | |
| 24 | I78区、2a面。 | 52 | D29区、溝6下層。 |
| 25 | G79区、溝94-2。 | 53 | B27区、溝26。 |
| 26 | G78区、土坑95（2a）。 | 54 | D29区、溝6下層。 |
| | | 58 | B27区、溝26。 |

図版一　突帯文期遺構 3a面・古墳時代遺構 4a面

落ち込み146・小穴（調査区北部、南東から）

溝48（調査区北端、北から）



落ち込み・小穴（調査区南部、北東から）

溝・土杭・小穴・落ち込み（調査区中央部、南東から）

小穴・地震噴砂痕（調査区南部、南西から）

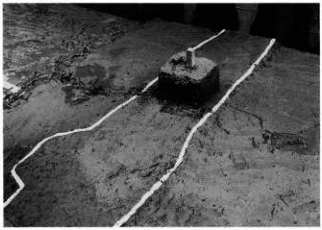
溝51　4a面（調査区中央部、南東から）

図版二　飛鳥・奈良時代？～平安時代遺構　水田畦畔　3a～3e面

アゼ13・126　3b面（調査区南部、南西から）

左同、水口（北東から）

大畦畔アゼ14　3b面（東橋台部、西から）



大畦畔アゼ42　3d面（調査区中央部、西南から）

大畦畔アゼ40　3c面（東橋台部、西から）

大畦畔アゼ43　3e面（調査区中央部、西北から）

畦畔断面　（調査区南部東壁面）

畦畔断面　（調査区中央部西壁面）

# 図版三　平安時代時代遺構1～3a面

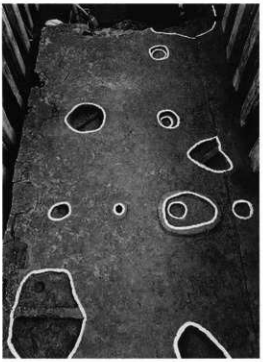
土杭・柱穴・溝　2b面（調査区南部）

南北大溝　1面（東構台部、北から）

土杭95　2a面（調査区中央部）

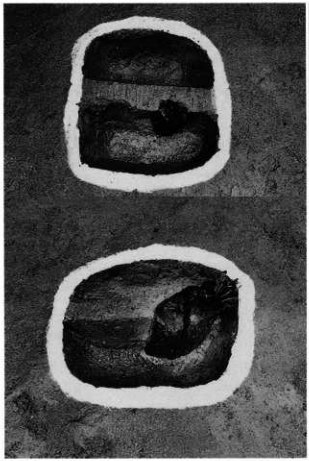
土杭・小穴・溝　2a面（調査区南部、北東から）

溝1　3a面・アゼ13　3b面（調査区南部、南から）



柱穴群　3a面（調査区南部、北から）

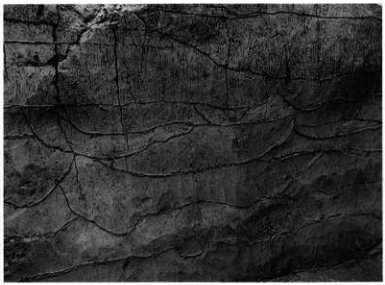
図版四　突帯文期5b面・平安時代遺構　2b面細部



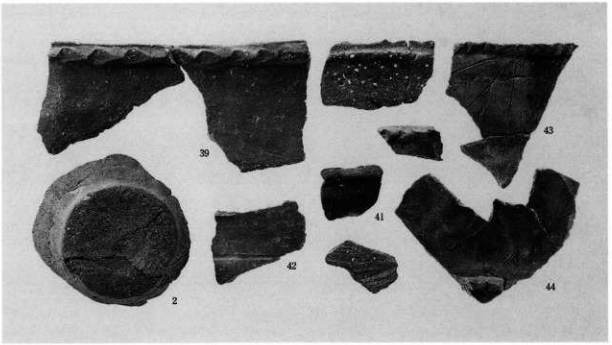
| | |
|---|---|
| 柱穴 119 | 柱穴 119断面 |
| 柱穴 120 | 柱穴 120断面 |
| | 柱穴断面（溝下検出） |

（3a面、調査区南部）

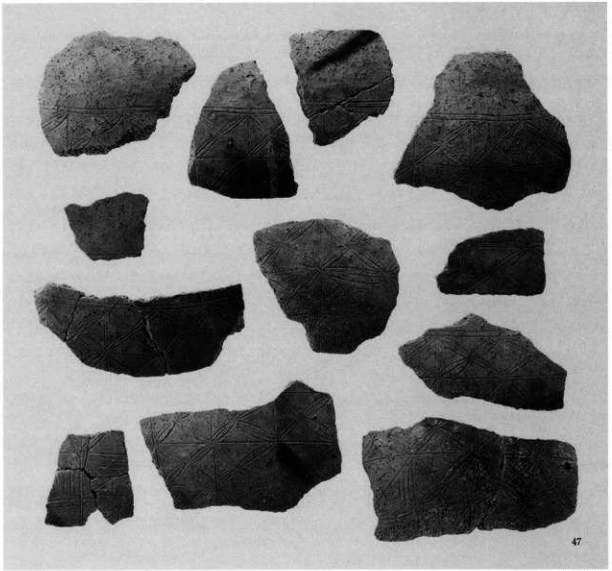
土杭52 5b面（調査区北端）



南北坪境溝（東橋台部北壁面）

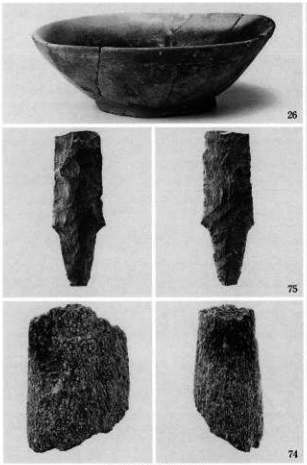



突帯文土器

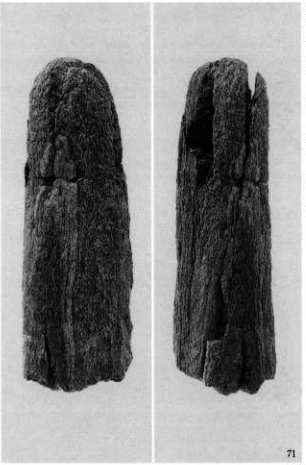



木葉文壺

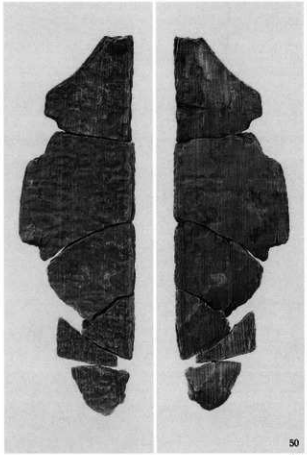
# 図版六　黒色土器・石器・木製品



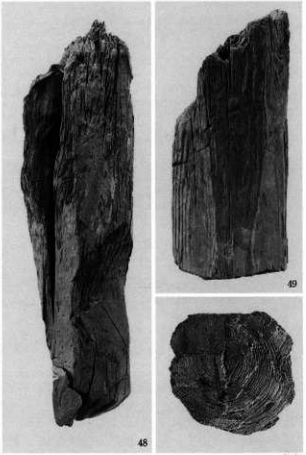

黒色土器・石鏃・石棒




石棒




鋤




柱根